
北天女神譚異聞 ~ Butcher's Wife ~

羽衣石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北天女神譚異聞（Butcher's Wife）

【Nコード】

N1787I

【作者名】

羽 衣石

【あらすじ】

天上界の「お助け女神事務所」に勤務する女神、二級神二種支援専門員セツクのもとに人間界からの電話がつながり、月光と共に降臨したセツクは肉屋の主人富海良太とめぐり会った。彼の依頼を受けセツクは商店街の精肉店でアルバイトとして働き始めることとなるのだが・・・。

chapter・01(前書き)

「ああつ女神さまっ」の二次創作小説です。原作の他にこの世界で女神に電話が繋がった人間が果たしているのか？繋がったとしたらその人は何を願うのか？女神さまって電話が繋がる前は何してるのか？というような自分の積年の疑問(?)を形にしてみようと思います。

アスガルド。天上界と呼ぶ者もいる、神々の住まう所である。三層九界に分かれる宇宙の上層に位置し、最も強い光りに溢れる世界である。中央に最も巨大な世界樹であるユグドラシルがそびえ立ち、大地から吸い上げ葉に集めた力を、世界に住む者たちに余すところ無く注いでいた。

ある日、アスガルドの美しい女神の一人が人間の世界へ降臨する。そしてある男と恋をして幸せに暮らすようになるのだが・・・この物語はそれよりも少し前の出来事である。

アスガルドの中樞の一角に女神たちが勤める建築物がある。軽く足に力を入れるだけで宙を舞うことのできる快適な重力のため、細い柱を幾何学的に組み合わせることで建物の強度は十分に保たれている。薄い透光壁で外部を覆い、しかも中に居る者には直射光が当たることのないように広葉樹の枝が計画的に配置され、生きいきとした葉が涼しい陰を作っていた。

ベルダンデーは普段かけることの無い眼鏡がずれ落ちそうになるのを直しながら、両手に書類を携えて歩いていった。書類と言っても紙面ではなく、光そのものを薄い平面状にして空間にとどめて、長方形の中を一定の法則で流れさせることでデータ化したものだ。彼女自身が担当した案件も含めた幾つかの報告書である。「お助け女神事務所」の所長たる女神総長はアスガルドの最高評議会の一員でもあり、彼女が多忙な時は事務所の決裁を事務次長が代行する。一級神であるベルダンデーは所属する女神の中でも上位にあり、担当部署の事業報告や予算執行等事務的な仕事も多く受け持っていた。この日は定例の決裁日であり、朝から書類の作成に追われていた。

建物の下層部にあるオフィスを出て、螺旋状の回廊を上がるとそ

こは数多くのブースの並ぶ広大なフロアになっている。人間界をはじめとしてさまざまな世界からの救済を求める声を受けたユグドラシル・システムが、厳選して真に救いの必要な者を女神たちの回線へとつなげる。女神たちは交代でブースに入りアクセスを待つのである。ベルダンデーにとってもブースの中で電話を待つのはとても幸せな時間だった。一級神へと昇格しかつて想像していた以上に事務仕事や他の女神たちへのサポートに時間を割かざるを得ないという状況を、不満とは言わぬまでも残念に思っていた。

あるブースの前を通りかかった時、頭上を空調の風が舞い広葉樹の枝葉が揺れた。頭上からの光が一瞬動いたためにベルダンデーは異変に気がついたのだ。

結界が張られていた。といってもかなり簡素な結界で、ブースの開口部に球状の膜が薄く広がって、シャボン玉のような淡い虹色を一瞬きらめかせた。立ち止まってブースの中を覗いてみると、中にいる女神の後姿が目視できた。少しだけ考えて、法術言語を詠唱しながら結界に踏み込んだ。ただの膜というくらい薄い結界なので、そのまま触れれば簡単に割れてしまうものだったからである。

「セック。」

声をかけられた女神が振り向く。その右手にはグラスがあり、意匠を凝らした電話機の傍らにあるボトルの中身が注がれていた。白ワインの淡い香りで満たされた結界の中で、セックと呼ばれた女神はベルダンデーとしばらく目を合わせていたが、悪びれることなくワインを口にしてから返事をした。

「見られちゃった。」

黒髪を結び上げた女神が、頬を朱に染め潤んだ瞳で見つめている。宵の口に一緒に呑んだ男なら震え上がりそうな美貌である。

「簡易結界なんか張ってるから何してるのかと思いましたよ。」

「においだけでも隠した方がいいかなってね。」

セックは二級神であり制度上はベルダンデーより下位なのだが、年長でありなおかつこの「お助け女神事務所」創設期から勤めるメ

ンバーである。ベルダンデーが着任した当初は指導員を務めたので、今でも彼女にとってよき「先輩」だった。気さくでおおらかな性格の上に、柔らかな物腰の中にそこはかとない艶っぽさを感じさせるあたりが、若い女神たちからも好かれている。

「禁止ではないですけど、仕事中的お酒はよした方がいいですよ。」
ベルダンデーは上位神として一応の注意はしているが、特に気にした風でもない。アクセス・ブースでの待機時間は席を離れなければある程度自由に過ごすことが認められている。セックという名のこの女神、神々の中でも上戸で知られ、元来陽気な性格が吞めば更に明るくなる。神のみならず天兵天女聖仙たちの、パーティ宴会合コンの類にはよく呼ばれては場を盛り上げている。それでも任務中の飲酒がクセになっているようなことはなかったので、ベルダンデーも一言注意する程度でとどめておいた。ただし、彼女が敢えて覗いてみたのにも理由がある。待機中にはある程度自由とのことになっているが、かつてセックは出勤途中に落命した鳥の遺した卵を見つけたことがある。その卵をあるうことか待機中に温め続け、雛が孵化して巣立つまでアクセス・ブースを占領し続けたのだった。雛のえさやりで手が離せないとの理由で人間界からの電話を切つてしまい、さすがにこの時は女神総長直々のお叱りを受けたという武勇伝の持ち主である。

「ごめんねえ、ベルダンデー。」

薄い化粧だが、口紅だけは以前より少し濃い色で引かれている。神属共通の額の紋章はやや高い位置に描かれているため、前髪で覆い隠されてしまっている。左の目尻の少し下に小さな真円の紋章が涙ぼくろのように描かれているのが、セックの容姿の特徴であった。「どうしたんですか、そのワイン。」

「北方で農場やってる友達を送ってくれたのよ。うちに帰って開けようと思って朝から眺めてただけだね。」

「開けてしまっただんですか。」

セックはくすりと笑うとボトルを手を取った。グラスの半分まで

ワインが注がれたところで、中身は無くなってしまった。つかの間グラスをくるくると回し、透き通る光の流れを楽しむように眺めていたが、思い切ったように最後のワインを飲み干してしまった。

「何だかねえ、今日はうちに帰れないんじゃないかって気がしてきたの。」

深く息を吐き出して、セックはシートに体を預けた。火照った頬の感触を指で確かめながら、ベルダンディーを見つめる双眸は何とも艶やかであった。

「予感ですか。」

「さあ、呑みたい気持ちの言い訳じゃないかな。」

その一言で二人ともくすくすと笑ってしまった。笑いながらベルダンディーの記憶がさかのぼる。二級神としてお助け女神事務所に配属になった日、女神総長から辞令と訓示を受け、先輩の女神やスタッフの天女たちから歓迎を受けた。もつともそれらの中に、異例の速さで昇格し鳴り物入りで登用された少女への羨望と嫉視が小さな棘のように混ざっていることも、聡明な若き女神は感じていた。自分にかけられた期待に応えること、礼節を守り増長しているなどと見られぬこと、何より送り出してくれた姉の笑顔を曇らせぬようにと、ベルダンディーは必死に努め学んでいた。そして初任者研修の最終日、セックは真顔でベルダンディーの前に立つといきなり両手で、ベルダンディーの柔らかな頬をつまみながらの言ったのだった。

「あなたの顔、真剣と言うより深刻に見えるわよ。」

ベルダンディーはあの頃より少し背が伸びたが、セックは少しも変わらないのだった。

電話が鳴った。笑顔のまま、ゆっくりと優雅な仕草でセックは受話器を取り上げた。

「はい、こちらお助け女神事務所です。ご用件はそちらでうかがいます。」

セックは受話器を置くと静かに立ち上がった。一言小さく法術言

語を唱えると、手元のグラスとボトルが光の渦の中に消えた。消去されたのではなく、セツクのロッカーへと転送されたのである。

「じゃ、行ってくるわね。」

「行ってらっしゃい。」

ベルダンディーはアクセス・ブースから三步退いた。シートが下がり、天蓋が変形する。柔らかかな光が浴びせられるとセツクの姿が薄らぎ、やがてベルダンディーの前から消えていった。

商店街は灯りが消え、人通りはほとんど無かった。このころはまだ郊外の大規模店舗と呼ばれる施設がまだ広まっておらず、様々な店が軒を連ね空店舗は見られてない。その中の精肉店の二階、住居部分の六畳間で店主が酒を呑みながらテレビを眺めていた。

三十歳にはなっておらず、一昨年から両親が続けて病で亡くなったため、商店街では最も若い経営者だった。しかし今その表情には年齢相応の若々しさが感じられない。この数日、閉店後は近所のラーメン屋で適当に夕食を済ませてから、深夜まで一人テレビを相手に湯呑みで酒をあおる日が続いている。手元には黒い電話機が引っ張られている。二杯三杯と重ねた後、おもむろに受話器を取り上げてダイヤルを回す。しかし、途中で手を止め受話器を戻し、再び酒を注ぐ。夜の深酒は仕事に障り、注文のミスが増え売り上げが落ち込む。昼間も一人やるせない気持ちで働き、今夜こそ早く寝ようと思っただけでも再び一升瓶を抱えてしまっていた。

テレビでは黒縁メガネの太った中年の司会者が、クイズの問題を読み上げた。

「・・・石見銀山。」

男はくぐもった声でクイズの答えをつぶやいた。それに続いて五人の回答者の答えが一斉にモニターに表示された。その様子を眠たそうな目で眺めながら、男は今度こそ電話をかけようと心の中で決めた。

黒い受話器を左手に持ち、右手の指で番号をひとつひとつダイヤルしていく。だが最後の桁を回せず手が止まってしまふ。じつと電話機を覗みつける、しかし表情にはあきらめの色が浮かんでいた。やっぱりダメだ、そう思った瞬間である。通常なら一定時間が過ぎれば接続が途切れるはずが、最後までダイヤルしてないのに受話器からは呼び出し音が鳴り始めた。あれっと思った瞬間、先方が電

話を取つたらしい。

「え、あの・・・。」

男は慌てて謝ろうとしたが酩酊した頭ではうまく謝罪の言葉が出てこない。

「はい、こちらお助け女神事務所です。ご用件はそちらでうかがいます。」

電話は切れた。男はしばらく呆然としていた。ゆっくりと受話器を置き、気持ちを整理するため敢えて一言口にした。

「寝よ。」

周りの物を脇に追いやり、たたんだと言うより丸めてある布団を広げようとした。その時ふいに頭上の電灯が点滅して暗くなり、テレビも同様に映らなくなってしまった。カーテンの隙間から差し込む月の光の中を、ほこりが舞い踊る。舞ったかと思えば、それはゆっくりと回転を始めた。渦の中をほこりが金色に輝いて、しだいにその数を増していく。そして金色の渦は中央に向かつて人の形を取っていき、輝きを収めていくと共に蛍光灯が再び点灯した。男が頭上を見上げ、もう一度窓の方に視線を向けた時には一人の女性が立っていた。

「こんにちは。わたくし、天上界のお助け女神事務所からやって参りました、二級神二種支援専門員、女神のセックと申します。」

男は完全に固まっていた。突然目の前に、それも何がどうなって光っていたのか全く理解できないところから女性が現れたのである。女神云々と名乗ったことを聞き逃したわけではなく、学生の時の美術だか世界史だかの教科書に載っていた彫刻の写真の記憶がよみがえったが、目の前の女性の美しさで瞬時に吹き飛んでしまった。長い黒髪は頭頂部で丸く編みこまれ幾つかの飾りが施されているが、頭髪そのものの美しさを引き立てるシンプルな造形だった。柔らかな眉のラインと大きな瞳、そして何より左眼の涙ぼくろが印象的だった。無論彼にはぼくろ以外の何物にも見えなかったのである。

「怖がらないでくださいね、とのみ富海良太さん。」

「な、なんで俺の名前を。」

ほんの三十センチ程の高さだったが、セックは空中からゆっくり降下した。その動きを見るまで、富海は彼女が宙に浮いていることに気がついていなかった。

「私たち女神はあなたのようにお困りの方をお救いすることを務めとしております。天上界の大いなる力、ユグドラシルの采配によりあなたは私たちの救済を得ることが適いました。さあ、どうぞ何なりと願いをおっしゃって下さい。」

「だから何で俺の名前知ってんだよ。」

「ただし、一つだけに限らせていただきます。」

「人の話し聞いてないだろ。」

女神たちの救済業務は主にミッドガルドに住む者たちに行われる。ミッドガルドとは三層九界に分かれた宇宙の中層であり、人間界妖精界精霊界の三界を指す。中層の三界もそれぞれ中心に世界樹を擁しているが、神界や魔界のそれに比べれば遥かに力が弱い。こと人間界においてはその世界の住人たちが世界樹の存在を感じられずにいるほどである。更に人間界に魔界からの干渉が強まれば、三界の相互干渉効果により中層全体に影響を及ぼすことになる。

もつともこのあたりの事情は魔属の側から見ても対称的に同じことであり、神魔両陣営にとって人間界への影響力の強化、いわゆる「シエア拡大」は重要施策であった。直接または間接的な人間との接触、それを行おうとする者への妨害や人間界を舞台とした直接戦闘など、当の人間たちには全く見ることもできず感じられないところで有史以前より激しい対立が繰り返されてきた。

高次元空間である宇宙の上層で生まれ育った神属にも魔属にも、中層の三界はあまり過ごしやすい世界ではない。何の準備も無く降臨すれば複合的体は同一空間におけるパラドックスを引き起こし、ただの霊体となってしまう。この状態は元の世界に戻れば自然に回復するが、霊体では何らの干渉も行つことはできずただ「のぞく」

だけである。従って中層において何らかの活動を行おうとすれば、常にシステムからのバックアップによる存在の確定とエネルギーの断続的供給を必要とする。これは、各神属（魔属においても）がそれぞれ所属する機関において行われるものであり、逆に言えば神属でも魔属でも身元の確かならざる者は人間を相手にしてもさしたることはできないということである。

お助け女神事務所のシステムは女神総長の所有するサーバーから構築された物だが、他の機関のそれと同様ユグドラシルのメインシステムと完全にリンクする。どの機関においてもシステムの担当者、アスガルド全体のシステム管理部の指導を仰がなくてはならない。ちなみにお助け女神事務所のような機関において管理業務を専らとする神属は「管理限定神」と呼ばれている。ベルダンディーの姉も先日まではこの事務所の管理に携わっていたが、現在はシステム更新作業のための研修を受講するため本部へ赴いている。

さて、事務次長への報告を済ませたベルダンディーは管理課を訪れていた。同僚の女神たちから支援システムの早期レベルアップについての要請を求める声が上がリ、どこでどのような話が進んだのかよくわからないうちにベルダンディーが代表で話をつけることになってしまった。

彼女自身はさほど不安を感じたことはない。だが、例えば人間が海に潜る時日の光の差す深さでも心理的圧迫を覚える者はいる。異世界への訪問が業務の前提である以上、安全確保の対策は慎重であるに越したことはない。そのような意見が出ていることを、管理主任へ伝達したのであった。

「支援システムにいくつかのエラーがあったことは認めます。でもこれはユグドラシルの自己診断機能によるデバックの影響であり、どの機関のシステムでも起こりえることです。この事務所のシステムも自動補正と管理神たちの手動調整で、あなたたちの業務の支援は十分にできていたはずですよ。」

反論は手厳しかった。管理主任もまた、お助け女神事務所では古

参の女神である。神属はもともと魔属との闘争の中で組織化されていった経緯があるため、軍部を中心として男性優位の社会であった。そのため主神の妻である女神総長を中心とした女神の集団も、当初は花嫁修業的な雰囲気のものだった。主神が世界経営の首座から退き幹部神たちの集団指導体制に移行した時、女神総長がその一席を占めたのは名誉職的な意味合いが強かった。しかし最高評議会の主席、いわゆる「神さま」の職を法の定めるところの任期にて禅譲することが明文化されると、女神総長は自らの任期に備えて配下の女神たちの社会進出を進めていった。軍部やシステム管理、法術、医術と言った専門分野の技術を習得させながら、それに伴う現場レベルでの人脈を強化していった。女神の集団で以って、女神総長自らの政権運営が実行できるよう図っていったのである。この管理主任はその方針に基づき各部門を渡り神格を高めていったのだ。

ベルダンデーが幼少から専門の教育担当者による英才教育を受けたことも一つにはこの方針が理由である。そのことを管理主任は理解していただろうが、若くして高い地位を得た者に対してキャリアを誇る者が隔意を抱くのは、人の世も神の世も常であるようだった。

せつせつとベルダンデーに説教しながら、手元の端末で現在進行中の案件についてデータを表示して見せた。「富海良太 男性

二八才 県立 東高校卒 卒業後上京し飲食店に勤務 二六才の時帰郷、同伴した女性と結婚すると共に両親の経営する精肉店で働き始める 翌年両親が相次いで逝去・・・」デスク正面の空間に情報画面が浮かび上がった。今やサービス課の代表として他の女神たちが起こしたミスや事故のケースまで叱責され続け、ベルダンデーは完全に辟易していた。画面に視線を送れば担当の欄にセツクの神押がある。人間界で情報のダウンロードを求め、受領確認が返信された証明である。

「聞いていますか、一級神ベルダンデー。」

「は、はい。」

同格の一級神であれば、やはり年長者が優位である。ベルダンデーを推挙した女神たちの思惑を感じ取った管理主任は、攻勢一方で反論を封じようとしたのだった。その時である。

「ほんと、昔から人間界に行くとか苦労するのよねえ。あの大洪水の時も上との連絡つかなくなっちゃってあなたと二人、ひどい目にあっただわよね。」

「そうですね。」

背後からいきなり投げかけられた声に管理主任は同調した。

「昔の苦労話持ち出して若手いじめるようになったらもうオバさんよね。」

「そうですねよ、って誰がオバさんなのよ！」

怒って立ち上がった管理主任の前には、セツクが缶ビールとつまみののったお皿を持つてのほほんとたたずんでいた。

「セツク、あなた人間界にいるんじゃないやなかつたの。」

「契約ならちやあんと取ってきたわよ。」

啞然として問い質すベルダンデーにも平気で応えて、ビールを一口すすった。

「契約者からお土産にもらっちゃった。」

「どうしてあなたは、昔からそういういい加減な態度で仕事をするの。」
気がつけば管理主任の怒りの矛先は完全にセツクに向いていた。

ベルダンデー相手には冷静に自分のペースで話を進めていたのだが、セツクに昔の失敗談を次々と持ち出されて興奮して声を荒げってしまう。それをまたセツクがけられけらと笑いながらあしらうものだから、更に騒ぎが大きくなる。今や管理課の全員が仕事の手を止めて二人の様子を見ていたのだった。

「ま、とにかく若いコたちに自分と同じ苦労させないように支援するのが管理神であり一級神であるあなたの仕事なんだからしっかりやってよね。」

「あなた、いつまでもそうやって気楽にやっているとと思ったら大間違いよ！」

「いいのよ、わたし『揺れ動く二級神』なんだから。」

「ごめんなさい、失礼します。」

完全に無視されてしまっていたベルダンディーが、強引に話を打ち切りセツクの手を引つ張りながら管理課から飛び出した。廊下をしばらく走り、街並の見下ろせるテラスまで来てようやく止まった。ベルダンディーは肩で息をしていたが、セツクは宙を浮いた状態で手を引かれていたので平気な顔で残りのビールをすすっていた。

「セツク、それで契約はどうなったんですか。」

呼吸を整えながら、ベルダンディーはセツクに聞いた。

「お店のお手伝いすることになったの。あつちの一日の内の半分が働く時間だから、残り半分こっちに戻っても家に帰る時間ないわね。」

「じゃ、やっぱり予感当たりましたね。」

富海良太は一週間ぶりに早く目を覚ました。昨日までは痛飲がた
たつて寝過ぎ、朝食も摂れぬまま仕事にかかる日々が続いていた。
体を起こし目覚まし時計をつかみ時間を確かめる。今起きれば余裕
を持って仕事にかかれる。目覚めもよく、二日前のように二度寝し
てしまいそうになかった。立ち上がり、以前の習慣通り布団をたた
んで押入れに戻した。昨夜は久しぶりに早く寝付くことができたの
だ。

・・・いや、確かに早くは寝た。だが飲まなかったわけではない。
よく見れば散らかしたままの部屋が片付いていて、コップも空き缶
も一升瓶も見当たらなかった。片付けた記憶は無い。いや片付けた
かも、と思い出そうとして止めた。思い出さずにおこうと決め、部
屋を出て階段を下りた。

朝食の用意を何もしていないということを考えながらキッチンに
入りかけて、味噌汁の香りに気がついた。ほったらかしにしていた
流し台はきれいに片付けられ、テーブルの上には一人前の朝食が用
意されていた。慌てて家の中を見て回った。居間も浴室も掃除がさ
れていた。誰が、と考えた途端に昨夜のことを思い出した。と言う
より思い出さないわけにはいかない現実を突きつけられたのである。
バタバタと廊下を走り店舗へ向かう。

「出て来い。」

などと声を荒げているが探す相手が隠れているわけではない。ただ
自分より早起きなだけである。

「おはようございます。」

その相手は逃げも隠れもせず、店で掃き掃除をしていた。狭い住
居兼店舗の自宅の中を大げさに探しておいて、いざめぐり合ってみ
れば富海の口からはまともな言葉は出てこなかった。目の前の黒髪
の女性は、昨夜出会った女性である。光の中から現れると言う理解

も説明もできない現れ方だった。彼女が何かを言った後、何故か一緒に飲んだのだ。久しぶりに楽しく飲んだ。そして、一人で寝たはずである。

「朝ごはん召し上がられましたか。」

過去一人を除いて見たことの無い、「にっこり」とした笑顔だった。

「あ、これから・・・。」

「お店のお掃除はしておきますから、ゆっくりなさって下さい。」
店側のシャッターから差し込まれた新聞を、小首をかしげながら差し出す姿を見てもはや富海は何も言えずキッチンへと引き下がった。

朝食は済ませた。富海が食べ終わりかけたころ、彼女はやってきてお茶を入れると再び店へ戻っていった。安い番茶しかなかったはずだが、いつもの湯呑みの中のお茶は非常においしかった。

新聞は読まず、お茶をすすりながら富海は考えた。最後の一口を飲み干すと、立ち上がり店へと向かった。昨夜何度も電話をかけそびれていた様子はみじんも感じられなかった。

「ちよっと。」

「はい、何でしょう。」

シャッターを開けてガラスを拭いていた手を止め、富海のそばまで戻ってきた。黒髪で顔だけは日本人と言われれば違和感はない。今身につけている服は昨夜の物と打って変わり、至極普通の服装である。富海が昨夜夕飯を食べに行ったラーメン屋の娘と実は同じ装いなのだが、彼の記憶には残っていなかったようである。

「名前、ゆうべ聞いたっけ。」

「セックです。女神のセックです。二級神二種支援・・・。」

右手を差し出し、発言を途中で止めた。

「女神って何だよ。だいたい何で朝っぱらから俺んちでメシ作ったり掃除したりしてるんだよ。君を泊めた覚えはないんだけど。」

「もちろん、昨夜はわたし天上界へ帰りましたわ。夜が明けてから契約に基づき再度降臨させていただきました。調理も掃除も全て契

約に基づき履行させていただきました。」

「だからあ、契約って何なんだよ。」

もともと女性と話すのが苦手な富海はつい声を荒げるが、セツクの方は楽しげに話を続ける。

「富海さんは昨夜わたしにおっしやいました。奥さんが当分帰って来そうに無くてお一人で店を切り盛りするのが困難だと。それで、お願いされたらわたしは何でもひとつだけかなえてさしあげますと申しました。すると富海さんはわたしに願い事をしてくださったのです。」

「ひとついいか。」

「はい、どうぞ。」

「君が来た後、俺、酒飲んでたか。」

「はい。そうだ、わたしも昨夜はご相伴にあずかせていただきましたましたわね。ごちそうさまでした。」

富海は愕然とした。言われて初めて、セツクの酌する姿の艶かしさや自分のくだらない冗談にはしゃぐ笑い声を思い出した。頭を抱えてしゃがみこんでしまった。

「お店のお肉でおつまみ作らせていただきました。作り過ぎちゃって天上界に持って帰るのにご承諾いただいてうれしかったです。」

「ああそう。」

初めて会った女相手に何をしゃべったんだ、俺は……。ふらふらと立ち上がると奥へと戻っていった。

「あの、富海さん。」

「朝ごはんおいしかったよ。でも帰ってくれていいから。昨夜何言ったか知らないけど忘れてくれ。」

そう言い残して行ってしまった。セツクはしばらく、人差し指を頬に当てて考えていたが、やがて掃除を再開した。お互い酔っていたとはいえセツクは富海の願いを聞き、それは受理されたのだ。

確か受理された瞬間彼は眠ってしまった。だから受理されたことを認識していないのかもしれない。後でもう一度きちんと説明

しようとセツクは思い、掃除を再開したのだった。

身支度を整え富海は仕事に取りかかった。黙々と商品を用意し開店の準備にかかった。セツクの存在を無視するかのように何も語らず仕事を続けていた。時折セツクが汗拭きや肉切り包丁を絶妙なタイミングで差し出すので、受け取ってから富海は渋い表情を浮かべてしまう。

開店時間になり、看板を出した。そこへ自転車で通りかかった青年が富海に声をかけた。

「よお良太、今日はまともに店開けられたみたいだな。」

酒屋の跡取り息子である和義だった。自転車にまたがったまま、大声で話しかける。

「カミさんまだ帰らねえのか、お気の毒に。」

「うるせえよ、デカい声出すなつて。」

和義は一才年上の幼馴染である。中学や高校では部活の先輩でもあったが、富海には兄弟のように接してきた。二年前富海が東京から戻り結婚した時にも、大声で裏切り者呼ばわりし路上で関節技を決めて熱く祝福したものだ。数日前に富海の妻が不在になってからは、毎朝ひやかしに来るのが日課となっている。

「ちつとも心配してるように見えないんだよ。」

「俺さまの知らないうちに勝手に結婚したりなんかするからこうゆう目に会うんだ……。」

和義の大声が急速にしぼんでいった。店内にたたずむセツクの姿が見えたからだ。セツクも気がつき軽く会釈をする。

「りよ、良太君。ちょっとこちらに来てくれないかね。」

三オクターブほどひっくり返った声で呼びかけながら、和義は富海の首に腕を回し店から見えない所まで引きずっていった。そしてセツクが視界から消えるやいなや、富海を一気に締め上げた。富海は声を上げられないままもがき苦しむ。

「何なんだ、あの女の子は。カミさんがいなくなった途端に十二連

れ込んでんだよ。」

「ち……がつ。違う、そうゆうのじゃねえ。」

「じゃあ、なんなんだよ。」

脳細胞の血流が途切れ途切れになりながら、富海は弁解した。

「だ、から……その……遠くに住んでる遠縁の親戚。」

ようやく和義が腕の力を緩めた。

「ああ、そうなの。ふーん。」

妙に明るい表情に変貌を遂げ、和義は店の前へと急ぎ戻っていった。

富海が呼吸を整えて戻ってくる間に、和義はセツクと話し続けていたようだ。もっともこの男も女性相手に話が長続きできないことはよくわかっていたので、富海は慌てなかった。

「それで君、名前何つての。」

「はい、わたし……。」

富海の声がセツクの言葉をさえぎった。

「セつちゃんだよ。そろそろもどらないとまた親父さんにどやされんじゃないの。」

「お、そうだな。セつちゃん、また来るからがんばんなよ。」

和義は来た時同様に大声を上げながら帰っていった。自転車をこぎながら度々後ろを向き手を振る和義を、セツクは笑顔で見送った。

「君も帰れよ。」

店内に戻りながら、富海はぶつきらぼうに言った。横目でセツクを見るとなぜかまた妙に嬉しそうな顔をしていた。

「セつちゃん？」

「え？」

「わたし、セつちゃんなんですか。」

「いや、だからあいつに女神とか言ったら変に思われたりするだろうからな。」

突然セツクの顔が富海の目の前に近づいてきた。富海は慌てて後ずさる。

「何ですか。」

「これからはわたしのこと、セツちゃんって呼んでね。」

「え?」

あっけにとられるベルダンディーを尻目に、セツクは「雨あがりのまうちほ」などと鼻歌を歌いながらオフィスを出ていった。

「ベルダンディー先輩、何なんですか今のは。」

「さ、さあ?」

セックが人間界で働くようになり一週間が過ぎた。当初はセックの顔見たさに近所の男たちが肉を買っては、帰宅後妻や母親にしかられると言うことが街中で繰り返されていた。しかし肉屋の客層と言えば基本的に主婦であるため、ブームは急速に落ち着いた。それでも気の利いた接客と朗らかな笑顔は街の奥様方にもそれなりに受け入れられていったのだ。

昼間おとなしくなった者たちは夜活動を再開する。今度は閉店後には近所の未婚既婚の男性が大挙して富海の家へとやってくるようになった。酒と食い物持参の宴会になっていくのだが、だいたいが商店主たちの集まりであるためか食品が素材で集まってくる。それらの具材をセックが調理してふるまうことになる。中には酒のつまみになり得ない物のあつたりするのだが、それらは富海の朝食や昼食に使われエンゲル係数の低下をもたらしている。そんな調子で富海の売上と家計はセックが来てから急速に好転していった。

男たちが集まり、まるでどこぞの大学生のサークルがごとき宴会が毎晩のように続く。セックがまたいける口であるため、勧められでは一緒に酒を飲んでいる。すぐに顔に出るので頬を朱に染めて酌を返していく様が余計に男たちを喜ばせる。一人冷静な富海が見ていて危なっかしくて仕方ないのだが、セックは平気で料理をしたりする。「セつちゃん、肉屋なんかやめてうちの店に来てよ」「バイト代弾むからさ」などと無責任かつ本気ともつかぬ勧誘が相次ぎ、中には酔った勢いで結婚まで申し込む輩もいた。

そうこうしているうちに、男たちが一般家庭での宴会に集まるため商店街の深夜営業の各店の経営に影響が出始めた。ついには商店街の外れにある老舗のスナック「麻美」の順子ママがセックをホステスにと引き抜きにやって来てしまい騒動に拍車がかかる。その後順子ママとの浅からぬ縁を噂される商店会長や各家庭の奥さま方の

介入という事態を経て連日のドンチャン騒ぎはようやく終焉を迎え、富海は平穏な夜を取り戻すことができた。

富海が店を閉めキッチンへと上がっていると、テーブルの上には夕食の用意が整えられていた。

「お疲れ様でした」

セツクが手を拭きながら出迎えた。富海はぶっきらぼうに返事をしながら椅子に腰掛け夕刊紙を広げた。セツクが冷蔵庫から冷えたビール瓶を取り出した。乾いた布で表面の水滴を拭い取り栓を開ける。差し出したグラスを富海が受け取ると、セツクがゆつくりとビールを注ぎ入れる。グラスの中で白い泡と黄金の液体は完璧な比率で層を成していた。直後にセツクは瓶をテーブルに置き手の温もりが伝わらないようにする。そしてキッチンを出るとかつて富海の両親の居室であった仏間へと移動していった。

富海はグラスのビールを一気におおるとおかわりは自分で汲み直した。泡の加減は普通と言えば普通である。しかしその泡の加減こそが市販の瓶ビールとは言え味に微妙な変化をもたらすものであり、生来味覚には敏感な富海の舌に一杯目と二杯目の味の隔たりは非常に大きく感じられた。三度の食事もまた同様である。このところ近所の連中の持ち込み食材に富海の食事は大きく依存してきたが、仕事の合間にセツクが近所の店から買い物もしてくれている。おかげで食事のメニューはバリエーション豊富で栄養面もきちんと考えられていた。そして富海がセツクと話をしながらない心情を察してだろう、必要以上に話しかけてこない節度も富海にはありがたかった。だからこそ、と言う気持ちがある彼の胸の中を支配するのである。

思考は巡るが空腹には勝てず、まるでマンガのような勢いで目の前の食事を食べあさった。セツクが仏壇の湯呑みをすすぎ、水を入れ換えてまた運んでいった。ちらりと自分の方を見たのは神ならぬ身の富海にもわかったが、ひたすら食べ続けた。うまかった。はつきり言っただけの家庭料理である。富海の母も妻も作ってくれたこ

とのある料理である。特別な素材で作られたわけではないことは明らかなのだが、母の味とも違い、また妻の作った物より格段にうまいのである。

食べ終わり、瓶に残ったビールを再びグラスに注ぎ飲んだ。

「お下げしてよろしいですが。」

「ああ。」

自分で洗おうと思っても、いつもセックが絶妙なタイミングで戻ってきて片付けてしまう。これでは雇用主と従業員ではない、下手するともう流行らない亭主関白の夫婦である。だが……。

「グラスつけておいてくださいね。それでは失礼します。」

「ああ、ありがとう。」

目を合わせずに礼を言うのが精一杯である。裏口のドアを閉める音が聞こえた。初めて会った夜以来、彼女が光に包まれる姿は見ていない。いつも裏口から出て行くのである。和義たち数名の不埒者が何度か後をつけてみたことがあったが、いつも五分とからず見失ってしまい首をかしげながら帰ってきたものだった。多分どうにかして天上界とやらに帰っているのだろう。

あの夜から彼女が魔法らしきことをする姿は見ていない。時々彼女が何だか聞き取れない言葉をしゃべっているのを聞いたことはある。教えてもない仕事を完璧にこなしたり、客足の具合や納品業者の遅刻を予知したかのような行動を取るのには、多分そういうことなのだろうと思っている。どの道一人で仕事ができるわけではないのだ。妻がいなくなつて、セックが手伝ってくれていることは本当に感謝している。

富海は立ち上がり、流しでグラスを洗いビール瓶も濯いで置いた。風呂場に行くと湯がちょうど良い加減で沸かしてある。きつと富海が入る時間を予知して、冷める温度も計算してのことなのだろう。服を脱ぎ体を流して湯船につかった。

「このままじゃな……。」

今夜も思うのである。彼女の世話になることをこのまま受け入れ

てしまったら、自分は妻の帰りを待つことを忘れてしまうのではないか。

富海の商店街から二十キロほど離れた山間地のテレビアンテナ塔の天辺にセツクは立っていた。強い風にセツクの身に纏う神衣の裾や飾り紐がなびいているが、足元には全く危な気が無く狭い塔の先端部にたたずんでいる。

黒い雲が流れ、月が現れたり隠れたりしている。セツクは風上を見据え雲が途切れるのを待った。彼女は基本的に光の属性であるため、この時間に法術を行使するにあたって安定した月光があることが望ましかった。無論法術によって雲を消し去ることは可能なのだが、その結果がこの地域に住む人間たちへ少なからず影響を与えることを考慮すれば、待つことは当然の選択である。

やがて雲が途切れ柔らかな月光がセツクの立つ鉄塔を照らした。天上界への要請は行わなかったが、体全体で感じる風圧に対して雲の流れが早かったことを考えれば、セツクの仕事が早く終わるよう気象に干渉したのである。お助け女神事務所への帰着が普段より遅れている。きつと心配したベルダンディーが気を利かせてくれたのだろうとセツクは考えた。

「また管理課から何か言われちゃったかしら。」
上空を見上げてセツクはつぶやき、ごめんネと心の中で付け加えた。彼女はこれからもう一仕事しなくてはならない。

セツクが深く息を吸い、ゆったりとした旋律を歌い始めた。同時に淡い光がセツクの周囲を包む。セツクの声が光の壁の中で響き、倍音を豊かに共鳴させていく。セツクのファルセットを残響のコーラスが支え、冴えた月光の中に澄み切ったハーモニーが響き渡った。コーラスが一定のコード進行を繰り返す。法術により自らの声で伴奏を作り上げると、セツクは反復する和音に合わせてメロディに詩を乗せた。

寡黙な男が愛する女を待ち続け、やがて迎えた死の床で光の中待

ち人が白い羽と共に舞い降りる。ひところアスガルドの神々の間に流行った歌だった。定命の者の秘めた愛情をつづる悲しい歌である。黙々と包丁を振り続ける富海の姿を思い浮かべながらセツクは歌った。

セツクが両手を振りかざすと彼女を囲っていた光の反響板が消え去り、その中にとどまっていた歌が一気に開放された。放たれた歌は風の中で旋律を刻み続け、この島国に住む全ての者の耳に届く。はつきりと聞き取れることはないが、風と共に女神の調べを心に受け多くの人間が安らぎを感じたはずだった。

歌い終えてセツクは鉄塔上で屹立したまま目を閉じている。月光に照らされその肌は白く輝いていた。鼻の鳴き声が再び聞こえ、風の流れも元に戻った。流れる薄い雲が月にかぶさり斜面に落ちる鉄塔の影が薄くなったその時、セツクの耳にその音は届いた。目を開き左斜め後方へと体の向きを換え、遙かかなたの街の灯りを見据えた。

富海の気持ちを歌に乗せて解き放った。そして同調する心を持つ者に反響するように法術プログラムを発動させた。無意識のうちに富海の思い人の心は、最も強いテンションノートだけを真直ぐにセツクの元へと弾き返してきたのだった。セツクはその音の強さや音程から反射地点までの距離を測定し、意識内部で人間界の地理データと比較し位置を特定したのだった。

遙か遠くに見える街よりも更に遠い、この島国の首都の雑多な人ごみの中に富海の妻はいる。そしてはつきりと音を弾き返したということは、彼女もまた富海へ強い思いを持っているはずであった。

セツクは静かに宙に上がった。淡い月光がその身を包み帯となつて少しずつ絡まっていった。天上界に戻れば、回りくどい術を使い余分な時間を使ってしまったことを叱責されるだろう。同じ事を調べるのもつとスムーズに行える法術は星の数ほどあるし、セツクにそれらが使えないわけではない。だが、人の気持ちを伝えるのに歌以上のものは無い。何度始末書を書いたかわからないが、それで

もセツクには自分の仕事にこだわりがあった。

わたしには永遠の命がある。だからわたしは待ち続けることができる。

セツクは光に包まれ、そして消えていった。また次の朝陽とともに降臨するまで、お助け女神事務所待機するのである。

昼過ぎまで降り続いた雨がおさまり、家に帰る学生たちの姿が見え始めるころには遠く北東の空に小さな虹がかかっていた。富海精肉店のガラスカウンターに肘をかけて遠くを見つめながら笑顔をかべるセツクの姿を、常連客のおばさんが不思議そうに見ていた。セツクの視線を追ってみるが、これと言って珍しい物は見当たらなかった。

「セつちゃん、何かあるの。」

「いらつしやいませ。雨が止んだからうれしいんです。」

返事をしながらセツクは、人間の視力ではあの虹は見えないということに気がついたのだった。おばさんの注文を受けて手際よく肉ツケを勧め、おばさんが買ってくるとセツクは満面の笑みを浮かべた。

数人の常連客が続けてやって来たが、その流れが落ち着くと西の空が茜色を帯び始めた。やがて部活を終えた学生たちが集団で商店街を闊歩するようになる。ファーストフードなるものがまだ大都市から広まっていないので、夕方のこの時間帯は一部の飲食店や駄菓子屋に多くの男子学生が集まるのだった。

アスガルド中央地区には相当数の神属が暮らしているので、地方の商店街の賑わいはセツクにとつて驚くほどのものではない。しかし永遠の若さを持つ神々は出生率が極めて低いため、成長期にあたる固体が集団で行動するということがあり得ない。教育機関は当然存在するのだが、学生の大半は神格を得ることを求める天兵や天女たちである。さらに一級神昇格や限定解除を目指す者を除けば、学生となる幼年期の神属はごく僅かなのである。

「そう言えば……。」

学生たちの姿を眺めながらセツクはつぶやいた。ベルダンディー

の妹が進学のため、親元を離れ姉のもとへと移り住んだとの噂を思
い出した。学生は専用区画での居住が原則であるが、入寮するまで
は三姉妹で一緒に暮らすらしい。

「何て名前だったっけ。」

セツクがベルダンディーの妹のことを思い出そうとした時、頭髪
を丸刈りにした中学生が駆け寄ってきた。近くに住む床屋の次男坊
とその友達だった。セツクはよく知らないが、たしか大人数で球を
打ったり捕ったりする運動をしているとのことだった。

「セツちゃん。コロツケ、コロツケ。」

「はい。」

彼らのために他より大きく作られたコロツケを包むと、代金を受
け取りながら手渡した。店の前でむさぼるように食べる様子を、店
内からセツクは微笑みながら眺めていた。神々は世界樹からのエネ
ルギー供給を受けるため空腹とは縁が無い。食欲が無いわけではな
いが、食事を取らずに済ます者も多い。セツクは人間界に久しぶり
に降臨して、神々に比べ短命ながら力強く生きる姿を目の当たりに
していたのだった。

残った包み紙をセツクに差し出しながら追加を所望する男の子た
ち。二つ目のコロツケをほおばりながら、セツクに部活や学校での
できごとを話してくれた。床屋の主人も富海の家での宴会に上がり
込んでいた口で、この次男坊が母親にせかされ度々迎えに来ていた。
セツクとはすぐに打ち解け、おそらくは契約者である富海よりもた
くさん会話をしているであろう。彼に連れて来られた友達も、当初
は美人のお姉さんを前に顔を赤らめ緊張していたが、帰宅前には必
ず顔を見せてくれるようになった。

その後も数人の中学生や高校生がコロツケを買いにやってきた。
中には評判を聞きつけ初めて買いに来た男の子や、夕食のおかず
と母親に頼まれて寄った女子もいた。店の前に男子生徒が溜まるの
に気がつき富海が大声で注意すると、セツクが慌てて頭を下げその
隙に走り去って行く。そんな男の子たちは先日もおなじように富海

に怒鳴られていたから、明日も懲りずにやって来るのだろう。

やがて学生たちの賑わいが過ぎ去ると再び常連の主婦たちが次々とやってくる。そんな調子でセツクは一日立ち働いていた。もつともセツクにとつては一日のことではない。肉屋が閉店し富海の夕食を片付けて天上界に帰っても、お助け女神事務所の職員としての勤務時間は終わっていない。人間界が夜明けを向かえ再び富海が店を開ける時間になっても、アスガルドではほんの少しの時間である。事務所のロビーやテラスでしばらく時間をつぶしたセツクが再び降臨する様子を見て他の女神たちが、「せわしないわねえ」などと呆れ顔で言っていたりする。その様子にベルダンディーは眼鏡越しに不安げな視線を送っていたのだが、彼女もまた自分の仕事に忙殺されておりセツクに声をかける時間をなかなか作れずにいた。

閉店後、夕食を終えてセツクが帰ってから富海は帳簿をつけていた。売り上げが少しずつ伸びている。夕方店の前が賑やかになるのが気になり始めたところからのことである。思い返せばセツクに揚げ物を任せるようになったのもそのころだった。

「コロッケか？」

富海はしばらく考えていたが、やがてグラスに残ったビールをおると立ち上がった。

「寝よ。」

彼もセツクに出会ってから変化が現れた。わけのわからない時は早く寝る習慣になったのである。

セツクが現れてから数週間が経ち、富海精肉店の前にしばしば行列ができるようになったとの噂が商店街に広まっていた。そしてその噂は、耳にした者が労苦をいとわぬ間に確認されることとなるのである。決まった時間ではないが午前中から昼食にと、あるいは夕食に、またはその場で食べるためにとコロッケを買いに求める人の行列が富海の店の前にできるようになっていた。

「何なんだよ、いったい。」

裏口から上がりこんだ和義が、肉切り包丁を持った富海の首を締め上げていた。

「肉屋の売り上げが増えて、何で酒屋に文句言われにやなんのだ。」

「そんな時には決まって客足が途切れ、セツクが板場に顔を出すのだった。」

「あら、和義さん行らしてたんですか。」

「おう、セツちゃん。忙しくて大変だね。」

例によって、セツクの前では和義の声は欧州のボーイソプラノよろしく音域が跳ね上がるのだった。ちなみに、夕食にとコロツケを買い求めた奥さんがそのまま酒屋で旦那に飲ませるビールを買いに走る傾向にあるのは、セツクの影響で和義も幸福量増加の恩恵を受けているためであろう。和義の店もそれなりに売り上げを伸ばしているのだが、経理や帳簿を母親任せの彼は状況の変化に全く気づいていないのであった。

セツクが髪を結び直し、手を洗い再びコロツケを揚げ始めた。夕方方の学生たちが押し寄せる時間に備えて作り置いた素材を調理にかかるのである。

「なんつーか、様になってるよなあ。」

「手え放せよ。」

和義が富海の首に手をかけたままセツクの仕事ぶりに見とれていった。

「実際よお、良太の母ちゃん生きてるころよく揚げたて食わしてもらったじゃねえか。ほら、セツちゃんの手さばきとかよ、おばちゃんとか分たがわねえって感じだよな。」

「配達先しよっちゅう間違える記憶力でそゆうこと言うのか。」

「おめえの嫁にあの半分でも器用さがあれば、おばちゃんも安心だったろうに。」

富海が怒鳴りつけようとする寸前にセツクが二人の方を振り向いた。今まで見せたことの無い、どこもない哀しげな双眸で和義を見

つめていた。セツクと目が合えばのぼせ上がる和義が、その視線に気おされ富海を引きずって店の奥へと後ずさりをしていった。

「良太。」

「いいかげん放せつて。」

「セつちゃんに嫁のこと話したのか。何で出てつたとか。」

「話してねえよ。て言うか俺にもよくわからんのに。」

「何で彼女、この店で働いてくれてんだ。もつといい仕事できるだろうに。」

「酔狂なんだろ。」

富海はようやく和義の腕を振りほどくと、持ち場へと戻っていった。

夕刻、再び富海の店の前は人だかりができていた。学校行事の関係か、はたまた夕方のドラマの再放送のためかは不明だが、この日は帰宅前の学生と買い物の主婦との混成部隊が一挙に攻勢をかけてきた。もちろん富海自身、店主としてこのような時間帯には板場から店頭へ出て接客を行う。しかし客の六割方が「セつちゃん一人の方がまし」と口にするくらいで、富海は客の注文の非連動一斉掃射に右往左往し、セツクの的確な指示によって何とか注文がさばけると言った具合であった。

そんな最中である。

「すみません、ちょっとお願いしますね。」

ふいにセツクが持ち場を離れ奥へと入っていった。声をかけるまもなく客の注文にうるたえる富海。黒山の人だかりに和義をはじめ近所の店主たちが見物に集まり、富海のうるたえぶりに野次を飛ばしてからかっていた。

やがてセツクが店の奥からコロッケの包みを持って出てきた。ガラスカウンターの脇の隙間を優雅な身振りでついと潜り抜け店の外に出る様子に、客や野次馬達が見とれて静寂が辺りを包んだ。皆の注目を知ってか知らずか、セツクは群集の間をすり抜け少し離れた

所に立っていた一人の女性の所へと歩み寄って行った。

「あの、私が揚げたコロッケ、召し上がっていただけですが。」

セックが差し出した包みをその女性は受け取った。デニムの上下に派手な柄のＴシャツを着て、キャップを目深にかぶっていたその女性は困惑した表情でセックを見つめる。周囲の人々がその女性の顔を見てざわつき始めた途端、

「萌^{もえ}。」

と富海が店内から大声を上げた。その声に弾かれるように女性が身を翻して走り出した。店からガラガラと調理器具をひっくり返す音が鳴った。やがて裏口から出てきた富海が通りを女性の走って行った方へと追いかけたが、角を曲がったその姿に追いつくことは出来なかった。

「セつちゃん。」

和義が声をかけてきた。

「和義さん、今の方・・・。」

「いなくなってた良太の嫁だよ。」

富海が走っていった方向を無言で眺めていたセックだったが、やがて店内へと戻りお客の注文をさばいていった。その夜、閉店の時刻を過ぎても富海は店に戻っては来なかった。仕事を終えた和義が寄ってみると、台所に用意された手付かずの夕食を前にセックが座って富海の帰りを待っていた。

「どっちが女房なんだかわからねえな。」

「わたし、そんな顔してますか。」

下手な皮肉を言われ硬い微笑を浮かべるセックの表情に、和義は何だか悔しさを感じた。

「もう帰んなよ。こんな時間までセつちゃん待たせてたら、良太のヤツも気まずい思いするぜ。それに、嫁さん連れて帰ってくるかもしれないし。」

「わたし、ここに来てから毎日とても楽しかったんです。おいしい物を食べるってことがこんなに人を幸せにするんだって、知らなか

つたわけじゃないのに何だかとても久しぶりに実感させていただきました。」

和義は返答に窮してしまった。事あるごとにセツクを誘い出そうと画策していたのに、いざ二人きりになってもいつにない沈んだ面持ちのセツクの言葉を聞く又何を言ったらいいのかわからない。

「いや、その、この街は貧乏なヤツらばかりだし、コロツケ一個でも喜んじゃうよ。」

「お客さまにも商店街の皆さんにも本当に良くしていただきました。それに富海さん、奥さまのことですらいいお気持ちでいらっしゃるのに黙々と働いてらして、わたしいつも立派な人間だなんて思ってたんです。そんな方のお世話ができてわたしうれしかったです。」

「ま、あいつも口が立つ方じゃないしね。」

オレのことは、とは言わなかった。さすがの和義にもプライドや自制心と呼ばれるものがある。

「毎日思ってたんです。いつか奥さまが帰っていらして富海さんが本当に幸せになれる、わたしはその姿をこの目で見る事ができるんだって。奥さまのこと、わたし毎日考えていたんですよ。」

「あいつの嫁の顔見てショックだったのかい。」

セツクはしばらく無言でいたが、静かに立ち上がり裏口の方へ向かった。

「お言葉に甘えて今夜はこれで失礼させていただきますね。和義さん、後のことお願いできますか。」

「そのつもりで来たんだよ。」

右手に握っていた一升瓶を持ち上げて見せ、和義は応えた。セツクは深々と和義に頭を下げると裏口から出ていった。さすがに今夜は後をつける気にもなれず慥然として椅子に腰掛けた。テーブルに置かれたグラスに酒を注ぎ、一口に飲んでしまった。眉間にしわを寄せて富海のために用意された夕食を眺めていた和義だったが、箸をつかむと本来食すべき人間の帰りを待たず勝手に食べ始めたのだ。

永遠の時を生きる神々であるが天上界に時間の流れが存在しないわけではない。人間界と同様、宇宙の中層にある妖精界や精霊界は曖昧な時間の流れの中で固体の長寿化や霊力の増大を図ってきたのだが、時間の滞りは宇宙全体の情勢変化への対応を困難にするという副作用をもたらした。人間より遙かに強い霊力を持つエルフやドワーフたちが中層を支配するに至らない事情がここにある。神属も魔属も抗争の中、自陣営の更なる強化を図るため時間管理システムの確立に心血を注ぎ、宇宙の理と世界樹の息吹のどちらをも味方につけるに至った。しかし神魔のいずれがより宇宙の意思に適う存在であるか、永劫の歴史の中未だ答えは見出されていない。

アスガルドが黄昏時を向かえ、お助け女神事務所の各階のオフィスに西の空からの日差しが入りかけていた。女神たちの退勤時刻が近づき、アフターファイブの過ごし方について話が弾み上司に叱責を受ける姿も見られた。そんな中管理課の入り口の自動ドアが静かに開き、プラチナプレートを施した細いフレームの眼鏡をかけたベルダンディーが速い歩調で入室してきた。眼鏡の下の視線はいつに無く険しく、同世代の親しい女神や彼女に憧憬の視線を注ぐ後輩たちが声をかけるのをためらうほどだった。彼女の歩みは一時もためらう事無く、オフィスの最奥部にある管理主任のデスクへと辿り着いた。

デスクで書類に目を通していた管理主任が視線を上げる。先刻とは打って変わりベルダンディーはその目を真直ぐ見返し、神衣の胸元から一枚の写真を取り出した。差し出された写真を受け取った管理主任は、それをしばらく眺めてから一言発した。

「これが何か。」

「主任がこの画像の記録を指示なさったのではないのですか。」

人間界に居るセツクとその契約者が写った静止画である。契約者が営む商店で働く二人の姿だが、セツクの表情を見れば仕事をしながら仲睦まじく談笑しているようにも見える。他の世界で業務に当たっている女神の状況をリアルタイムで映像化できるシステムは助け女神事務所の中でも管理課のみが備えている。基本的には魔属との接触等有事の際の緊急措置を目的とした物であるため、女神総長や事務次長の判断を仰がずとも管理主任は現場の状況を目視できるようにになっている。撮影機器やオペレーターを送り込まずあらゆる状況の画像を被写体に気取られることなく撮影が可能なため、女神が派遣された地域であれば容易に隠し撮りができてしまうのだ。

実際に救済業務を担当するサービス課においては、女神派遣が決定した事案については担当者専任が原則である。制度上待機中の女神がブース内でモニタリングを行うようになっていたが、それも契約者等のバイタルサインや周辺区域の地理や気候、政治経済状況等がパラメータで表示される程度の情報しかもたらされない。

「確かにわたくしの指示で撮影させた画像です。なぜこのコピーをあなたが入手できたのかしら。」

「事務次長の許可をいただいてシステムのバックアップデータから抽出したのです。決して管理課にハッキングなどかけておりません。」

「今度はベルダンデーが強い口調で管理主任に問い質していた。

「セツクの担当しているケースについて、契約者の身边に急な動きがあったのです。」

「一向に姿を現さなかった契約者の妻が突然帰宅したと・・・。それではセツクの任務は完了ですね。」

「いえ、彼女は契約者に再会する寸前で遁走してしまい再度行方をくらましてしまいましたので。それより問題なのは、彼女が動き出したきっかけです。」

「妻が何らかの理由で夫のもとを去り、夫の方も行く先について全く心当たりがないわけでもないのに呼び戻すことをためらっていた。

その夫に対しセツクは両者の関係修復を図るでも無く、依頼内容が明確でなかったのをよいことに人間界に無意味に駐留している。彼女の勤務態度について、サービス課では何の問題にもなっていないのですか、ベルダンディー。」

「そんな話をしに来たものではありません。」

ベルダンディーの表情が一層真剣な物となる。これこそ真理に反するものに対した時には例え上位者であっても恐れることなく自らの信念を貫くベルダンディーの強さの現れであり、彼女をよく知る者が恐怖を感じる時の表情である。しかし管理主任もまた神一倍ひと気高い、お助け女神事務所の中でも未だ数少ない一級神非限定クラスの女神である。こと下位の者に対しては一歩も妥協することは無くまして相手が近々検定を修了し限定解除を最高評議会から認定されるであろうともっぱらの噂であるベルダンディーであれば尚のこと容赦はしまい。周囲の部下たちは烈雷のごとき怒りが起こることを恐れ少しずつ離れていった。

再びベルダンディーが口火を切った。

「正式に申請をした上でセツクの場合における関係者の動向をさかのぼって調査しました。遠方にいた契約者の妻に差出人の記載の無い書簡が届き、中に入っていたのがこの写真だったのです。」

「自分から出奔しておきながら、いざ夫が他の女性という姿を見ればいてもたってもいられなくなる。宇宙の理を知らぬ弱き心の者の行動は常に浅はかなものだけに御しやすいですわ。」

「では主任は、ご自身がこの写真を送りつけたことをお認めになるのですね。」

「つまりわたくしがセツクの仕事に横槍を入れたと抗議に来たというわけですね、あなたは。」

双方の詰問に一旦会話が途切れ、広大な管理課の空気が凍ってしまったかのように張り詰めた。スタッフの誰もが二人の女神の静かな怒気に押され動けなくなってしまうた。

「このような物を見せつけられれば動揺するに決まっているではあ

りませんか。」

「苦難に耐えうる強い心を持ち得なかった妻、決然とした態度で解決を図ることをしなかった夫、どちらにも相応の非があるでしょう。もつともわざわざ降臨しておきながら徒に時間を費やした女神こそ責められるべきとわたくしは考えますが。」

「たしかに一日の迷いが永年の悔いを生むこともあるでしょう。でもわたしたちと違い定命の存在である人間は、悩み苦しみを抜いてこそ一瞬の魂の輝きを得るのです。そしてそれによりその後の幸福を獲得するのです。そのために契約者の傍にいて支えてあげたいと思うセツクの気持ちがおわかりになりませんか。」

ベルダンデーの主張を聞きながら、適度な硬さのシートの上で身をよじりデスクの上で組んだ手にほっそりとしたあごを乗せると、管理主任は大儀そうに言った。

「女神の干渉によりアスガルドのいくばくかのエネルギーを人間界にもたらし、幸福量の総量を僅かずつでも増加させる。それにより人間界で失われた世界樹の力を復活させ神属側へ取り込むことが我々の目的です。しかしセツクのように長居してやみくもに幸福を振り撒けば、魔属を呼び込み別の人間に不運や墮落をもたらす結果につながりかねない。事実セツクが何度そのような失態を引き起こしたか、あなただって知らないわけではないでしょう。」

「お言葉ですが、そのような事故は発生してから事務所の総力を挙げて打開を図るのが筋と言うものです。予見を以って専任事項に干渉するのでは本末転倒ではありませんか。」

「管理課としてはセツクの仕事ぶりを容認できないと言っているのです。」

ふと管理主任は周囲の女神たちのざわめきに気づいた。彼女たちが後方に視線を送り何事かを小声で話している。ベルダンデーが身をひるがえし管理主任もその体越しに目を向けると、彼女ら二人を取り巻くその向こう側にまさにセツクが立っていたのだった。いつにない神妙な面持ちを浮かべながら二人に歩み寄ってきたが、そ

の視線がベルダンディーと管理主任のどちらを向いていたのか、当の二人にも判断しかねた。

「一級神がむやみにケンカしちゃだめよ。」

ベルダンディーが唇をかむ。セツクの顔を見れば管理主任の先ほどの指摘が、棘のように心に刺さる気分になる。要救済者への慈しみ、女神たちが「愛」と呼ぶその物を実践の中で教えてくれたセツクは、ベルダンディーにとってもう一人の師と呼んでも差し支えない存在だった。だが時としてセツクはその「愛」のため事務所の営業方針を逸脱する。管理主任の言い分が一面正鵠を射ていることは承知の上である。ベルダンディー自身も一級神に昇格しサービス課における一定の権限を持つようになってから、幾度かセツクに訓告や減俸の処分を下している。それにより問題を課内で処理してきたのだが、セツクはそのようなことにまったく意に介さない。上位昇格などに毛ほどの価値も抱いておらず、仮に事務所から放逐されることがあっても肅々と受け入れるのである。それがセツクの強さなのか頑迷さなのか神ならぬ身の・・・もとい群を抜いて優秀な女神であるベルダンディーにも確信が持てないのだが、セツクのやり方もまた自分たちの仕事の一つのあり方と認めている。だからこそ管理主任の干渉が許せないのであった。

「代わりにあなたがわたくしに抗議しようと言うわけですね、望む所だわ。」

管理主任は執務シートから立ち上がり、笑みすら浮かべてセツクの前まで歩み寄った。その表情にベルダンディーは記憶があつた。戦闘部の訓練の一環として他部署に勤める女神との模擬戦があり、この管理主任は時に中堅クラスのワルキューレをも倒すことがある程の実力者だ。過日その容赦の無い闘いぶりを直に見学したベルダンディーが見たのが、まさに今の管理主任の表情だ。よもやこの場で暴力沙汰には及ぶまいが、先刻の意趣返しもある。セツクの不手際を厳しく言い立てるに違いないと、ベルダンディーは更なる論戦を予期して言語中枢の活性化を図ろうとした。が、

「ありがとう、いつも見守ってくれて。」

管理主任の目を見つめセックが言い、ベルダンディーも当の管理主任も意表をつかれた。管理課の女神たちも上司の行為が行き過ぎではないかと危惧していただけに、当のセックが苦情を言いこそすれ謝意を表すとは思っていなかった。

「契約者の奥さまがふいに現れた時はわたしも驚いたんだけど、こちらに帰る途中で気づいたの。あなたが奥さまの背中を押してくれに違いないって。富海さんが、契約者が奥さまの気持ちを図れずにずっと悩んでいらしてるのを見て何とかして差し上げたいと思ってたんだけど。」

「何とかって、何とかできたでしょう。何のためにわたくしたちの力があると思ってるんですの。」

「やっぱり強引にでも会わせちゃった方が良かったかな。でもそれでまた奥さまが出ていっちゃたりしなかったかしら。」

「そしたらまた連れ戻しなさいよ。それでどこか盛り場でも温泉宿でもいいから二人そろって放り込んじゃえばよかったじゃない。あなたがいつまでもダンナの横にいたってしょうがないでしょ。」

「でもね、おっしゃったのよ。彼、酔ってたし今にも眠ってしまいそうだったんだけど、契約の時におっしゃったの。」

「何て。彼は何言ったの。」

「俺はあいつが帰るのを待つことしかできないから、助けるって言うなら店手伝ってくれて。仕事さえできれば待つていられるからって。なんだかね、この人かっこいいなあって……。」

「ばかじゃないの。いつもそうやって男の人があなたに向かって言っただけでもないセリフに惹かれてつくしちゃうのよ、あなたは。何回だまされれば気が済むのよ。」

「別にだまされてるってことはないけど……。」

「ええ、そうでしょうよ。だまされたのは最初の一回きりよね。それであなはかつて一番大切なものを失ったのよ。あれだけ痛い目見ておいて、どうしていつまでたっても同じ事を繰り返すのよ。ど

んなにあなたが彼に感情移入してつくしたところで奥さん帰ってきたらそれまでじゃない。長く一緒にいたらそれだけ後で辛い思いするのよ。」

「では主任は、そうならないようにセツクの任務に干渉なさったんですか。」

横からベルダンディーに核心をつかれ、管理主任は自分がしゃべり過ぎたことに気がついた。セツクの態度に興奮してしまい部下たちの見ている前でつい本音をしゃべってしまった。そうだったんだ、主任って意外といい神^{ひと}じゃん、などと周囲の女神たちのささやきが聞こえてくる。

「ごめんね、いつも心配かけて。」

セツクが瞳を潤ませながら管理主任に抱きついた。

「事務所立ち上げの時のメンバーで残ってるのはもうわたしとあなただけよね。みんな昇格したり結婚したりして、ここから巣立っていった。あの時からずっとわたしを見守ってくれてる友達は、もうあなただけ。」

「よしてよ。あなたみたいな半端な二級神と友達だなんて・・・。」
管理主任は最後まで言うことができなかった。セツクが正面からキスをしてきたので口をふさがれてしまったのだ。傍から見ても異様なほど顔を赤くして、主任は視線を周囲に泳がせた。ベルダンディーや部下たちが呆然として自分たちを見ていることに気づき、恥ずかしくて頭に血が上っていく。

「もう一度、富海さんたちの所へ行ってきました。そして今度こそ、あなたの期待通り、二人に幸せになってもらってくるわ。」

涙をぬぐい笑顔を浮かべてセツクは管理主任に言った。そしてベルダンディーにもひとつ微笑みを送ると、きびすを返し小走りで管理課のオフィスから立ち去っていく。その背中に終業を知らせるチャイムが重なった。啞然としたままセツクを見送った管理主任だったが、はっと我に返り自分を見ている周囲の女神たちをしっかりと見つけた。

「何をしているの、早く仕事に戻りなさい。」

「終わりましたよ、主任。」

一番近くにいた部下の一人が言い、立ちすくんだ上司を残して次々と管理課員たちは帰宅していった。夕陽の差し込むオフィスに管理主任とベルダンデーだけが残された。

「あの、さっきの話についてお聞きしてもいいですか。」

「何ですの。」

再びセツクに振り回され疲れ果てた管理主任が力なく応じた。

「セツクが大切なものを失ったってどういう意味ですか。」

ベルダンデーに背を向けたままで、しばらく管理主任から答えは無かった。やがて振り返ってデスクへと戻り卓上の端末を起動させたが、ついにベルダンデーには目を合わせずつぶやいた。

「言えませんわ・・・友達なもの。」

セックが降臨する際のアクセスポイントは固定されてはいない。十分ほど歩けば富海精肉店に辿り着く位置で人目につかない場所に降臨できるよう、システムが自動でポイントを設定するのだ。この日はいつもより離れた中学校の校庭のポプラの樹の真下に降りた。夜中に雨が降ったのであろう、枝先から時折しずくが落ち朝陽を反射して輝いていた。床屋の次男坊を始めセックが来てから多くの常連客となった生徒たちが通う学校だ。後年この学校の敷地は全て高い塀に囲われることになる。セックは校庭から川沿いの土手へ上がり、商店街へと渡る橋を目指して歩き始めた。いつもより少し遅くなりそうだが、こうして商店街を見渡しながら歩くのは今日が初めてであることに気づきゆくり行こうと決めた。風が無く澄んだ空気の中、天上界の時間ではほんのつかの間であったが、セックが通った街が少しずつ目覚めていく。

こうして人間界に留まれる機会がセックにとっては幸福だった。天上界で不幸だというわけではないが、管理主任が言ったようにかつてセックは失うべからざるものを失った。だがそれはある意味自ら手放したと言っても過言ではない。だから自分を責め何も手につかない程落ち込んでいた時期がある。多くの神々に励まされようやく立ち直ることができた。その時から確かに自分は変わったと思っている。何事も無ければ永遠に生きる身の上であるからこそ、後悔や自責の念にも永遠にとらわれてしまふ。一人になることを恐れ、呑みに誘われれば顔を出したりしていた。やがて何度かの人事異動が繰り返されかつてのことを知る者が少なくなってくる。引越したり髪の色を染めてみたりあるいは泊り込みで仕事に没頭したりして、過去のことを気にせず過ごす時期もあった。一時期は周りの勧めもあり一級神への昇格を目指したこともある。だが自宅で一人勉強などしていれば、ぼっかりと空いた心の穴と向き合ってしまうこ

ともある。一級神になった未来の自分を想像しようとするれば、置き去られようとする過去の自分が後ろの暗闇からじっと見つめていることに気づく。陽気に振る舞い周囲に気を使わせまいとしてきたが、結局自分を欺くことはできなかつたようだ。

セツクは橋を渡り、商店街の通りを歩いていく。店構えのひとつひとつを見れば、そこで働く人たちの顔が思い浮かぶ。富海の家での供宴に酔ったご主人や仕事の合間に忙しく夕食の買い出しに走る奥さま、店の隙間を出入りし裏通りや空き地を駆け回る子供たち。人間との触れ合いを楽しみ、他の女神に比べつい長居してしまう。癒されているのは自分の方なのだ。そしてその思いに至る頃がいつも潮時だ。

いつものように裏口から店に入った。毎朝富海が目覚める前に来るため、法術で施錠を解除して入っている。よく考えたら富海に断りのないまま毎朝力ギを開けていたことに今更ながら気がついた。台所が上がってみればテーブルには和義が眠っており、足元には日本酒のビンが転がっていた。和義の背中には毛布がかけてあり、洗いかごには夕食の食器がきれいに洗ってあった。富海は一緒に酔っ払ってしまったわけではなさそうだ。和義が留守居の任を果たしたか否かセツクは疑ってしまったが、自分がそれを咎める立場ではないことは承知している。ため息とともに法術言語を唱えると淡い光が和義の体を包む。彼の体は瞬時に消え去り毛布がふわりと床に落ちた。

「なるほど、女神さまはそうやって悪いヤツを地獄に送るわけだ。」
背後から声をかけられセツクは驚いて振り返った。階段を下りてすぐの入り口に富海が立っていた。両の眼が充血していて顔色は幾分青ざめていた。

「そんな、和義さんのお宅へ送り返しただけです。」
「冗談だよ。」

富海は台所に入ると毛布を拾い上げ、今度は仏間の方へ行き毛布

を放り込んで戻ってきた。同刻和義の部屋では、彼の母親が押入れの布団の間から頭と右腕をだらりと垂れ下がらせて眠っている息子の姿を見つけ絶叫を上げていたのだった。

「眠っていらつしやらないんですか。」

再び台所へ入ってきた富海にセツクは不安げに話しかけた。

「別に一晩中あいつを探してたわけじゃないよ。」

返事をしながら富海は鍋や食材を用意し始めた。

「朝ごはんはわたしが作りますから、もう少しお休みになってください。」

「いいよ、座っててくれ。いつもうまい飯作ってもらったから、今日はお礼に俺が作る。」

振り向きもせず、富海は手際よく調理を始めた。

「東京にいたころは働いてた店のまかないでよく作ってたんだ。それに親父が板前の修業してたことがあったもんで、子供の頃から包丁とか教えられてたんだよ。」

初めて富海が自分の過去のことを話してくれた。昨日妻が姿を見せたことが影響しているのだろう。セツクは静かに座ると、まな板に向かう富海の背中を見つめていた。

「俺は一人息子だし、店を継ぐのが嫌だったわけじゃない。でも、親父と氣質が似てたんだろ？な、高校の時はどうでもいいことで毎日親父とけんかしててさ。卒業したらとにかく家を出たくって上京したんだ。でもやっぱり食いモンで生活してたんだから俺も芸が無だよ。」

適度な火加減でだしをとりながら、手際よく具材も切り分けている。炊飯器を見ればどうやらセツクが来る前に炊きつけてあったようだ。話をしながらも、セツクの目から見て富海の手際に無駄は無かった。

「萌はさあ……。」

「奥さまのことですよね。」

「ああ。まだ君にあいつの名前教えてなかったっけ。女神さまは何

でもお見通しかと思つてたけど。」

「人間の世界では必要以上の力を使わないように制限がかかるんです。」

「そんなもんなのか・・・何の話だっけ。」

「奥さまの。」

「そうだ、萌つてんだだけだね。今時洒落た名前だろ。」

セツクはうなずいた。時代が移れば変わりもしようが、国民の多くが豊かさを享受する少し前の時代にあつては珍しい名前かもしれない。

「東京生まれでさ、復興でどんどん変わっていく街で育つたつて言つた。子供のころから映画とか色んなショーとか見せてもらうことが多かつたつてんで、あいつ女優なんか目指してたんだよ。」

セツクは黙つて聞いている。

「小さな劇場（こま）の貧乏劇団（こま）にいてさ。なかなか食えないもんだから、俺のいた店でバイトしてたんだけどとにかく不器用でね、店長によつちゆう叱られてたよ。顔がいいんでウェイトレスとしては客に喜ばれてたけどな。」

「富海さんがそんなに嬉しそうにお話しなさるの、初めて見ますね。」

「一瞬調理の手を止めた彼がどんな表情をしたのか、想像してみてもセツクの方がなんだか嬉しくなつてしまった。」

「あいつな、けつこう気が小さいし人見知りする方なんだよ。こつち来てからも近所（ちか）とあんまりなじめなくてさ。あいつのことを他人（ひと）と話すの初めてかもしれない。」

「和義さんはどうだったんですか。」

「あんなヤツだけど、仲間内じゃけつこういい兄貴分だからな。いろいろ気も使つてくれた。だけど、萌が芝居やつてたつてことあんまりしゃべり過ぎちまつた。萌が付き合いがうまくないのが、その内に女優さんだからお高くとまつてるなんて噂されるようになってきたんだよ。」

「噂って、その時はもうお芝居やめられてたんでしょ。関係ないんじゃないですか。」

富海は苦笑いを浮かべた。たしかに関係ない。だがその関係ないことに振り回され気を使うのが人間なのだが、女神さまはそうではないのだろうか。いつもまっすぐな瞳でほほえみかけてくれるセツクのことだからきつとそうではないのだろうと、富海は思った。

副菜を盛り付けご飯と吸い物をよそい、セツクの前へと手際よく並べていく。対面の席へ自分の食器も並べると、富海は座って手を合わせた。

「いただきます。」

「あの。」

「何だよ。」

「ご自分でお作りになったのに、どうしてわたしにむかっただきますっとおっしゃるんですか。」

「何言ってるんだよ。誰が作ったモンでも今日のご飯が食えることは神さまに感謝していただくもんだよ。」

「でもわたし神さまから直接ご指示をいただいたわけではありませんせんし。」

「君の言ってる神さまって誰。」

「神属の最高評議会主席の座にいらっしやる方です。」

「じゃ君を寄こしてくれたその人に、いただきます。」

「わたしを派遣されたってことでしたら女神総長さまにも言っていないただかないと。」

「女神総長さま、いただきます。」

「ではわたしは富海さんに、いただきます。」

「おかしな子だな、君は。」

「よく言われます。」

セツクは汁椀を持ち少し息を吹きかけてから静かにすすった。うれしそうな表情を浮かべ、焼き魚に箸を伸ばし小さく取り分けて口へ運んだ。仕事の時もそうなのだが箸を持つ手がしなやかで美しい

と、富海は感心して眺めていた。幼少のころ、何かにつけて口やかましかった父親に箸の持ち方を来る日も来る日もしかられながら育った富海だったが、就職した時箸の持ち方を店長から誉められた時は父に感謝したのである。そのことを告げる機会を得ぬまま彼の父は他界した。

「味はどうだ。女神さまは普段さぞかしうまいモン食ってんだろうからこんな飯口に合わないか。」

「富海さんがわたしのために作ってくださったんですもの、とってもおいしいです。」

「それって味の評価じゃないと思うけど。」

小さな口で静かに、しかしながらよく噛みセツクは味わって食べていた。見守りながら富海も意識せず静かに食べていた。半分ほど食べたところでセツクがつぶやいた。

「わたしたち神属は普段何も食べないんですよ。」

セツクの一言は意表を突き、富海はむせそうになった。

「腹が減るってことが無いのか。」

「もちろん食事を味わう楽しみは生活習慣としてあります。でも生体エネルギーは基本的に天上界のシステムから直接供給され長期間の蓄積が可能ですから、人間のように空腹に合わせて食事を取るということはありません。」

セツクの言葉を呆然と富海は聞いていたが、聞いたことのほとんどが想像できなかった。この場合は黙って食べるしかないだろう。

「食事を提供する機関で会食やパーティをすることはありません。でも、わたしのために作っていただいた料理をいただくのってこれが初めてなんです。」

食べながら富海は顔を赤らめてしまった。

「奥さまにも作って差し上げてたんですか。」

「結婚する前はな。稽古があるからどうしても仕事の時間が少なくなるんで稼ぎが無いから、しょっちゅう腹減らしてたよ。あいつの下宿で何度も飯作ってやってたけど、他の役者仲間まで集まってく

るもんだから落ち着いて食べたためしはなかったな。」

「でも楽しかったんじゃないんですか。」

富海はセツクの言葉に笑顔を浮かべたが、すぐに返事はせず一気に食事を平らげてしまった。

「確かに楽しかったよ。でもあいつ、途中で体壊して芝居が続けられなくなったんだ。何とかもらった端役に必死でしがみついていたって感じだったけど、だんだん体がついていかなくなってた。そのころには親が借金やら何やらで離婚してたりして帰る場所も無くしてた。だから俺は店を辞めて萌を連れてここに帰ってきたんだけど、今にして思えばあいつ、俺と結婚したのは断るだけの気力が無かったせいだったのかもしれない。」

「そんな……。」

「結婚してから、正直言ってお袋とうまくいってたとも言えなかったし。俺はあいつに余計な苦労かけさせただけだったんじゃないのかな。」

セツクは言葉に詰まってしまい、出された食事を黙って食べることにしかできなくなっていた。これまで店の仕事を覚えるため店内の残像思念から何度か情報を引き出したことがある。その時若い女性の胸を引き裂かれるような思いを感じ取った。だがそれが、はたして富海の言っていることを直接裏付ける物なのだろうか。セツクにはわからなかった。一級神なら、ベルダンディーならこの場で答えを出せるのだろうか。

食べ終えて箸を置き、セツクが口を開きかけて富海を見ると、彼は椅子に背を預けて眠ってしまった。彼自身が語ったように一晩中妻を捜して歩いたわけではないにしろ、いろいろと考えて眠れなくなってしまうたのだろう。セツクは席から立ち上がり富海の背後へ周った。このまま眠らせては開店の準備に差し支える。ましてもう一度彼の妻が訪れる可能性が高い以上、彼自身店に立つ気でいたに違いない。でも……。

セツクは後ろから富海の首に細い腕をかけ抱きついた。高速言語

で法術を発動させる。立っていた床の感覚が無くなり富海家のキッチンが消失した。いや、世界が消失しセツクは富海を抱きかかえた状態で暗闇の虚空を漂っていた。時間の流れから飛び出したのである。わずかでも富海が眠っている間進行中の時間を離れ、休養を取らせた上で元の時刻の数瞬の後に復元する。この法術は本来ならセツクの能力を超えるものだが、過日何か必要な気がしてベルダンデーに指導を請い体得したものだ。十分とは言えないまでもひと寝入りするだけの時間は稼げるはずだった。

富海の体を強く抱きしめ、そのぬくもりをセツクは感じていた。人間の平均的な体温に他ならぬ暖かさが、セツクには富海が抱く妻への愛情に思えてしかたなかった。セツクの瞳からわずかずつではあるが涙がにじみ、虚数の表す空間のいずこかへと水滴が流れ去っていく。違う、これは富海への愛情ではない。自分が失った、あるいは得られなかったものを富海と彼の妻は持っている。それがつながりやを失いかけている。だからそれをもう一度つむぐのが自分の務めだとセツクは確信した。だが同時に自分が失ったものを富海の妻が得ることへの嫉妬心が湧き上がるうとするのにも気づいていた。このまま時間を離れ二人で虚空をさまよい続けたら、少なくとも自分は、偽りであるとわかっていても幸せをつかむことができる。そう思った瞬間である。

「時は絶えることなく流れます。でも幸せな時間はゆっくりと、もしかしたら止まってしまふほどゆっくり流れるんです。生体の心拍や血流ももちろん無関係ではありませんが、幸福であることはわたしたち神々でも容易に変えることのできない大河を逆流させることすら可能なんです。だからセツク、かつてあなたがわたしに教えてくれたことを、一級神ベルダンデーの名においてあなたにお返しします。愛を捧げて下さい。そうすればあなたは、たとえ二級神の身であっても、時の銀河をきつと越えることができます。」

ああ、ベルダンデー、だからあなたはノルンなのね。今、道に迷いそうになつたわたしをあなたは救ってくれました。

先日のベルダンデーの言葉を思い起こし、セックは時間超越の法術を駆使することに持てる力を全て発揮した。そしてかつてないほどの力が自分の中に湧きだしてくるのを感じていた。この人を幸せにしてあげたい。地上界に来てずっと思い続けていた気持ちをセックは改めて強く誓い、契約者たる男を抱きしめて時間の虚空に踏みとどまっていた。

泣き出しそうな雲、と店先から空を見上げていたセツクが一言つぶやいた。昼時の客が落ち着き富海は奥でセツクの作った昼食を摂っていた。

徒歩や自転車で通りかかる人々が横目でセツクを見て行き、あるいはあからさまに立ち止まりセツクと目線が合うと逃げるように去っていく。皆、昨日富海の妻が姿を現したことを知って様子を伺っているのだった。ガラスカウンターの端を静かに抜け、セツクは店の外に立った。立てかけてあった竹ぼうきを持ち通りの真ん中まで進み、ゆっくりと商店街を見渡した。多くの人々がセツクの姿を見て慌てて歩き出し、あるいは自分の店の中に入っていった。

ぼうきを振り店の前を静かに掃き清めていった。数日前近所の金物屋のご主人に、

「何でそのぼうきで音が出ないんだ。」

と言われたことがある丁寧な掃除だった。多くの日常的な作業を自動化した天上界にあっても時に義務として手作業を行うことがある。お助け女神事務所の開設当初、業務成績の芳しくなかったセツクはことあるごとに女神総長の叱責を受け、罰として掃除をさせられたものだった。悠久の時間が流れ多くの経験を積み、掃除を命じた女神総長の真意の一端をわずかでも理解できるようになったかと自問自答する。こんな時はぼうきや雑巾を手に体を動かしていれば、いらぬことを考えなくてすむ。

いらぬことって何かしら。昨日逃げ去った富海さんの奥さまは、今日は来られるかしら。今日来られなかったら明日来ることなんてできるのかしら。

音を立てずほりも上げずセツクはぼうきを動かし続けた。掃除に集中することで女神の鋭敏な神経が更に研ぎ澄まされる。通りにいる全ての人も足音も息づかいまで感じられ、買い物を終え立ち去

るうとする様子もこちらへ向かう足音も、電柱の傍や店の中でささやく声もセツクの耳に届いてきた。

「何やってるんだろ、わたし。」

ため息ひとつとともに振り返った。そこに誰がいるのか振り返る前にわかつていた。こんな時は女神であることがわずらわしくなる。デニムの上下に派手な柄のＴシャツ、その胸にプリントされたデザインの髪はパーマがかかり美しく波打っている。セツクと変わらぬ、富海よりわずかに低い背丈。細くきりりと上がった眉。目鼻立ちを整い、舞台ではさぞ映えるであろうと思わせる。セツクがまっすぐに見据えるその眼前に富海の妻がいた。商店街の人々が遠巻きに、興味の視線を送る中堂々と歩いてきたのだった。

富海が外のざわめきに気づき店先に出てきた。だが彼女は夫に視線を送る事無く、セツクの顔を見つめていた。引け目を感じるいわれなど全く無いにも関わらず、セツクの方が気後れし深々と頭を下げた。それに合わせて相手も礼をした。先ほど掃き清めた地面を見ながらセツクは思っていた。少なくとも今のこの人に、今朝方富海から聞いた弱さは感じられない。体を損ね人間関係に疲弊していた時の弱い気持ちではなく、何か怒りのような気持ちを抱いてここまでできたのだ。だからこそ帰ってくる気持ちを奮い立たせることができたのだろう。管理主任が送りつけたという写真を彼女が見て何を思ったのか、それで抱いた怒りが理不尽なものであったとしても、それを受け入れることは妻が戻るまでの扶助という富海との契約の履行に含まれるのではないだろうか。

ゆっくりと顔をあげたセツクの左の頬に、鋭く振られた富海萌の右の掌が打ち付けられパシッと乾いた音が商店街に響いた。完全に予想通りの出来事であったが、セツクは頬の痛みに涙が流れてきた。

セツクと富海夫妻はガラスカウンターの内側で丸椅子に座っていた。先刻店先で萌がセツクを引っ叩いたことに周囲の人間が萌に抗

議するのを富海とセツクが二人がかりで必死に止め、萌を連れてようやく店内に入ったのだった。セツクは自分の左手で頬を押さえていたが、白い指の隙間から見える肌は明らかに腫れていた。富海が必死に謝るが、セツクは首を横に振るだけで富海も萌をも責めようとはしない。萌の方はうつむいたまま黙っていた。

「あの……。」

と言葉を発したのは店内の誰でもなく常連のおばさんだった。

「何だよ。」

と富海が思わず大声を上げてしまい、慌ててセツクが立ち上がり何度も頭を下げながら注文を受けた。状況を察したおばさんは、セツクが頬を腫らしたまま肉を容器に詰めるのを見て何か言いたげであった。しかしセツクにいつもの笑顔で商品を手渡され何も言わぬまま帰っていった。おばさんを見送り店の外の様子をセツクが何うと集まっていた人々がクモの子を散らすように立ち去っていった。その中で頭一つ分背の高い男性は、和義に間違いないだろう。

「よかったね、良ちゃん。いい人に働いてもらって。」

萌が口を開いた。

「ずいぶん楽しそうにしてる写真見せてもらったけど、実際お客さんの相手も上手だし、私なんかに比べたら良ちゃん安心してカウンター任せられるわね。」

「写真って何だよ。」

富海の返事にセツクの方が慌ててしまった。写真の件は富海に話していかなかったからだ。セツクの様子の変化に萌は気づいたが、口に出したのは別のことだった。

「別に。とにかくこの人がいるんだったら私この店にもう必要ないし、その……。」

「彼女は、お前が帰って来るまでって約束で働いてもらってるんだ。本当は他の仕事があるみたいだし、その、お前が帰ってこなきゃ困るだろ。」

「彼女が困るから帰って来いっての。良ちゃんこそ彼女がいなくな

「つたら困るんじゃないの。」

富海が次の言葉を言うより早くセックが頭を下げた。

「ごめんなさい、富海さん。わたしの方の手違いなんです。」

「この子が良ちゃんとお楽しそうにお仕事してる写真を私の所に送ってくれたのよ。何も心配するなつてメッセージだったのか、それとももう帰ってくるなつてことだったのかしら。」

「確かにその写真を送ったのはわたしの職場の者ですし、奥さまに早く帰っていただいて富海さんへの支援を早く終了させるようにと意図してのことでした。不愉快なお気持ちにさせてしまったことはお詫び申し上げます。」

再び頭を下げるセックに萌は目を逸らしてしまつたが、今度は座つて自分をじつと見つめる富海と正面から目が合つてしまつた。慌てたように立ち上がると板場の方に進んでいった。

「奥さまなんて気持ちの悪いこと言わないですよ。こつちは下町生まれの役者崩れ、けちな肉屋の女房ですから。もつとも、その女房の立場もどつかのお嬢さまに取られそうになつちやつてるんだけど。」

「ごめんなさい、わたし奥・・・萌さんのお留守の間お手伝いすると富海さんと契約を結んだので、お戻りになればそれでわたしの仕事は終了です。わたしはそれで帰りますから。」

「契約つて。なに、良ちゃんこの子と何の約束したの。私のいない間に働いて、お礼に何してあげるわけ。」

「いえ、報酬は必要ないです。富海さんにご負担していただかなくてはならないようなことは何もないんです。」

「いいのよ、あなたさえ良ければいつまでもいたつて。なんか私が帰らなきゃいつまでもいてくれるみたいない感じだし。」

「セつちゃん。」

突然富海が二人の話に割つて入つた。なぜ萌ではなくセックを呼んだのか、富海の言葉の続きを待ちながら二人はそれぞれにそう思つた。

「ほつぺた、腫れてるの治しなよ。そうゆう魔法もあるんだろ。」

「魔法……。」

萌が夫の言葉の意味を理解できず、富海とセツクの顔を見比べる。だが、元々色白なだけに今のセツクの頬は両側で色が極端に違って見えたため、自分のしてしまったことを後悔しセツクの顔は直視できなかつた。横目で見ればセツクの方が申し訳なさそうな顔をしている。

「そんな眼で見ないで……悪かったわよ。」

「いえ、いいんです。富海さんのおっしゃるようにすぐに治せますから。」

「彼女は女神さまだから、魔法が使えるんだよ。」

「何言ってるの、良ちゃん。」

富海の言葉の意味が全くわからない萌が呆然と見守る中、頬に当たったセツクの掌から暖かい輝きがあふれ出てきた。体のどこかに余計な穴があいたかのような声を萌が出している間に、光は静かに収まっていく。そしてセツクが左手を下ろすと腫れはひき元の状態に戻っていた。

「萌、俺はな、何年もお前の下手な芝居を客席から見てきたんだ。」

セツちゃん相手にケンカ吹っかけてみせたってな、ほんととは謝るきっかけ探してるのが見えみえなんだよ。」

富海が丸椅子から立ち上がり、白衣をずれを直しながら板場に戻った。冷蔵庫から肉塊を取り出し、包丁を手に仕事を始めた。

「彼女はほんとに女神さまなんだ。お前がいなくなつて俺が途方に暮れる時、満月の光の中から二階の汚い部屋に降りてきてくれた。そしてお前の代わりに働いてくれたんだ。」

萌は富海の言葉を聞いて改めてセツクの顔を眺めた。どこをどう見ても自分と変わらぬ、ただの女に見える。じつと見ていれば前髪の間から肌色ではない何かが見えるが、それが人外存在を証明する物とも思えない。だが、さっきまでの自分の暴言や暴力を気にも留めていないような笑顔を見てみると、少なくとも女神さまのよくな人だとは言ってもよいとは思っていた。

「俺の願いは萌が帰って来ることだ。出て行った理由を知りたいわけじゃない。」

富海はそれ以上何も語らず、肉を刻み続けた。

富海が仕事を再開したので、セックと萌は並んで店先に立った。それでも外からは営業再開したようには見えないようである。あれから買い物しようとする人は現れなかった。

「あの・・・セっちゃん。」

「はい。」

おずおずと萌が声をかけるとセックは体ごと向きを変えうれしそうに返事をした。

「その、ごめんね。痛かったでしょ。」

「もう平気です。それよりわたし、萌さんが帰ってきて下さって本当にうれしいです。だって、富海さんがあんなにうれしそうにお仕事してらっしゃるんですもの。」

「そ、そうかな。前からあんな感じだと思っただけど。」

板場を見ると富海は唇をかんで包丁を動かしている。こちらの声が聞こえているのは明らかだった。再び萌はセックの顔を見た。この子私より年上なのかなあ。物腰はたいそう落ち着いて見えるが、笑顔は少女みたいだしはきはきとした物言いが育ちの良い世間知らずの娘のようでもある。

「セっちゃんってほんとに女神さまなの。人間じゃなくて。」

「はい。」

宣言されてしまうとそれ以上突っ込みようがない。

「富海さん以外の人には内緒にしてくださいけど、萌さんには隠さなくてもいいですよ。奥さまなんだから。」

「奥さまはやめてっば。」

「ごめんなさい。」

「もう謝らないですよ。私が悪いのに、あなた今日何回謝ったのよ。」
そう言われてセックもばつの悪そうな顔をして再び外を向いた。

よく考えれば、萌が戻った以上契約は終了だ。事務所に電話して帰還の手続きをしなくてはならない。でも……。

「萌さん、もう、どこにも行かないですよね。」

セツクの問いかけに萌はすぐに返事をしない。それが返事なら天
上界に帰る前に何らかの手立てをしなければならないと、セツクは
思った。

「さっき言ったこと、丸つきり嘘じゃないの。」

「それはつまり離婚を考えてらしたって意味ですか。」

「はつきり言われるときつい。」

「じゃ、本心で離婚したいわけじゃないですよね。」

小声の会話は再び途切れてしまった。セツクは振り向くことなく
富海の様子を伺った。聞こえてはいないと思うが、人間の五感は時
として尋常ならぬ力を発揮する。富海に聞こえているかもしれない
し、萌もそう感じているかもしれない。

「私たちが結婚する前のことは。」

「今朝、富海さんが話して下さいました。」

「私、子供できないのよね。」

セツクは返事をせず黙って続きを待ち、萌も返事が無いのでぼつ
りぼつりと続きを話した。

「体壊してお芝居やめちゃって。結婚して生活変わったからだいぶ
ん良くはなっただけけど、二度も流産したの。最初の時はお義母さ
んをすごくがっかりさせちゃったから、二度目の時は良ちゃん妊娠
も流産も誰にも言わずに隠しててくれた。お義父さんが亡くなって、
その後もう一度妊娠したんだけど、今度はお義母さんまで亡くなっ
て。良ちゃんに話せずにいたら、四十九日が過ぎた後また流産しち
やったの。もう良ちゃんに言えなくて、そしたらお義母さんの遺
影が恐くて見られなくなつて、それで私……。」

必死で涙をこらえて話していたのがとうとう抑えられなくなり、
萌は出してあったままの丸椅子に座って泣き出してしまった。それ
でも外に聞こえないよう声は必死でこらえていた。

「萌……。」

やはり聞こえていたようだ。背後から富海が声をかけたが、後が続けられなくなった。セツクが以前残像思念の中から感じた悲しみはこれだった。かつて自分も感じた悲しみに似ていると思ったのだが、先程お助け女神事務所の管理課では涙を浮かべてしまったのに、今は泣けそうにない。この人たちの前では泣けない、とセツクは心の底から思った。

「わたしは、一度だけ産みました。女の子でした。」

アスガルドは神属の世界である。それに対し魔属の住む世界は元々ヴァナヘイムと呼ばれていた。それぞれの世界樹を中心に栄えていた二つの世界は、抗争ばかりでなく交易や交流も行われていた時期がある。内紛や政争に敗れた部族や行き場を失った難民が、互いの世界を隔てる「事象の荒野」を徒歩で渡りそれまでの敵地の民となることもあった。戦場や人間界を経ての亡命者は、敵対勢力の情報を得るといふ意味合いから表向き歓迎された。

セツクがまだ高等教育学校の学生であったころ、一人の亡命者と出会った。彼は魔属軍における陸戦部隊の指揮官であったが、その当時は亡命してアスガルドの市民権を得て軍事研究機関に席を置いていた。初恋に身を焦がし情熱的に愛を捧げたセツクを彼は受け入れ、彼女の卒業と同時に二人は結婚したのである。亡命者にとって結婚は身分保障に有利に働く。学校教育を修了したばかりの女神が元魔属の、それも軍部出身の者と結婚するという事に危惧を抱く神属は多かった。セツクの友人の中にははつきりと反対の意を表す者もいた。しかし愛を成就させたうら若き女神に夫を疑う気はみじんも無かったし、夫が上奏した論文の幾つかが外交や軍事担当者の目に留まり高い評価を得たことで、周囲の声も心配より祝福が勝っていた。そして程なくセツクは懐妊することになる。

出産が近づいたころ夫の身边に変化が現れた。それまで自宅に知人と呼ぶことの無かった夫のもとに来訪者が増えるようになった。彼によれば、同じ魔界からの亡命者たちであり生活上の不便が多いことからいろいろと相談に乗っているとのことだった。そのうちに彼は妻を締め出してまで部屋で亡命者たちと密談を繰り返すようになり、それに伴い治安当局者の監視や尋問が強化されるようになった。夫は尋問に対し理路整然と対応し全くやましいところを感じさせることにはなかった。

妻が臨月を迎えるようになって、それまで家を空けることの無かった夫が度々留守にするようになった。セツクは当局の者に夫への疑いを否定し続けた。しかしある日、屋内で亡命者の一人が処分し忘れた一片のメモを見つけ、猜疑心にかられると同時にセツクは強い陣痛に襲われた。断続的に続く激しい痛みの中で法術を駆使し過去に夫の部屋で行われた会話の再生を試みた。先んじて法術の対抗措置が取られていたため、一度の法術では十分な情報は得られなかった。対抗障壁フレイアウォールによる肉体への衝撃と陣痛に耐え、セツクは夫を含む亡命者の一団による犯行計画の全容を知り、絶望と共に昏倒した。直後に帰宅し倒れている妻を医局へと運んだ彼女の夫が、セツクの行いに勘付いていたか今となっては知る術は無い。

セツクが意識を回復したのは、まさに出産のさなかだった。そんな状態の妊婦が医局の名と所在地をしきりに尋ねることを看護師は不審に思ったが、それを気にしていられないほど危険な出産だった。医師と看護師による懸命な処置により、母体の消耗は激しかったものの乳児は無事に生まれた。女の子だった。永遠の命を得た代償に極度の少子化という社会問題を抱えていた神属にあつて、新たな女神の誕生を多くの者が喜んだ。

分娩室から個室へと乳児と共に移されたセツクは、疲労しきっていたが睡魔に耐え看護師たちが去るのを待った。セツクが突き止めた犯行計画、それはアスガルドの要神に生まれた赤ん坊を誘拐するというものだったのだ。偶然か否か定かでないが、同時期に生まれるセツクの児と対象を入れ替え犯行の発覚を遅らせるとの計画に気づいた時、セツクはそれまで信じていた夫への疑念が洪水のごとく湧き出し、彼女の精神は耐え切れず意識を失ったのだ。わが子の存在を犯行計画に組み込んでいとなれば、まさに夫が首謀者であることを証明することになる。臥床したままセツクは夫が病室に駆け込んで来るのを待った。計画通りであれば夫はまずセツクに気づかれぬよう乳児を連れ出すはずである。つまり彼女が起きている間に夫がやって来れば犯行は実行されない。だが、夫は来なかった。

このままでは計画は現実の物となる。身を挺して阻止するだけの力は今のセツクに残されていない。それでも亡命者である夫の犯罪を他者に告発することがセツクにはできなかった。計画が知れば仮に実行されなくても夫は司直の裁きを受ける。そうなって夫と永遠に会うことも適わなくなることがセツクには一番恐ろしかった。

灯りが消されるとセツクは乳児を抱えて、ある病室を探し病棟内をさまよった。そして目的の部屋のドアを開け、静かに侵入した。中では一人の女神が生まれただけの赤ん坊とともに眠っていた。数刻の後セツクの夫にさらわれるはずの赤ん坊である。セツクはその赤ん坊を抱き上げると空いた寝台へ自分の産んだ児を横たわらせた。もとの通りと寸分違わぬように毛布をかけると、入った時と同様静かに出ていった。

誰にも気づかれないことなくセツクは自らの病室に戻り、出る前と同じように横になった。安心しきったように眠る赤ん坊を見ながら、セツクはようやく眠りについたのである。彼女ははたして気づいていたか。否、気がついていなかったであろう。セツクは愛する夫を誘拐犯にさせないために夫に先んじて児を入れ替えたのである。夫が計画を実行に移せば、娘ともども夫は魔界に去ることになる。そのことに気づく前にセツクは出産に至り、疲労により昂ぶった神経のまま事を成したのである。

翌朝医局は乳児が一人居なくなっていることで大騒動になっていた。しかも母親は通常の出産では考えられぬ程の疲労で目を覚まさず、父親は出産の直前から姿を消したままだった。やがて目を覚ましたセツクに子供が居なくなったことを看護師たちが謝罪しても、彼女は上の空で窓の外を見ているだけで何の反応も示さなかった。その後数人の元魔属が軍事物資を強奪の上国境を突破したことが警備隊から中央に報告された。奪われた物資の中には戦地で傷病者を搬送する医療用車両も含まれていた。治安当局者が逃亡者の中に夫が含まれていたことをセツクに告げた時、彼女はようやく事件の全貌を口にしたのだった。

それからのことはセツクの記憶にほとんど残っていない。外交担当の幹部神が魔界の大使を呼びつけ折衝を重ねたが、魔属側は強奪物資の保障は認めたものの誘拐事件としての立件には応じなかった。実行犯が魔界との連携のもと事件を画策したかは不明だが、結果的には父親が母親に無断で乳児を連れ出した民事事件として処理されたのである。同様に本来誘拐の被害に合はずだった要神夫妻も被害届を出すわけにはいかなかった。現実に病室から彼らの児をさらったのはセツクだったからである。その夫妻がセツクに謝意を伝えることも逆に罪を糾弾することも、ついには無かった。

時間が経ち一通りの調査が終わった頃になって、セツクはようやく自分が一人残されたことを実感した。肉体的にも精神的にも失調を来たし、長期の入院生活を余儀なくされた。当時専科学校（人間界で言うところの大学）に進学していた、結婚に最後まで反対していた友人が見舞いに訪れたことがある。病室で彼女が目にしたのは、幼い頃から大事にしているぬいぐるみを抱きかかえ、うつろな瞳でその口元に乳房をあてがうセツクの姿だった。

再び悠久の時間が流れた。主神の妻たる女神総長自らが主催する機関「お助け女神事務所」が設立されるにあたり、スタッフの募集が始まった。準備委員会の段階から関わっていた友人の裁量により、ようやく回復を見せたセツクは開設メンバーの一人として採用された。かつての事件のことは多くの女神の知るところだったが、新たに稼動された事業の忙しさと華やかさの中で皆セツクの抱える悲しみのことを忘れていった。そうしてセツクは神属社会へ復帰を果たしたのである。

富海夫妻は始終黙ったままセツクの話聞いていた。外国よりも遙かに遠い世界での、人類が地球上に現れるより遙か以前の出来事である。語られた話の全てを理解できたわけではなかったが、セツクが失ったものの大きさは感じる事ができた。

「萌さん。」

セツクが呼びかけたが、萌は顔を上げることもしなかつた。

「萌さんがどれだけつらい思いをされたか、わたしにわかるなんて言いません。わたしの方がつらかつたって言いたいわけでもありません。ただ、わたしはお二人に幸せになっていただきたいと願っているんです。」

セツクは振り返って富海を見つめた。

「富海さん、これからも萌さんとずっと一緒にいて下さいますよね。」

「君に返事することじゃないよ。」

富海は萌の横に座り、うつむいたままの妻の横顔に語りかけた。

「もうどこへも行くな。俺は、お前にずっとそばに居てほしい。」

黙ってうなづく萌の双眸から大粒の涙が流れ出た。萌の頬を伝い落ちた涙が床に弾けた時、女神にだけ見える光がセツクの瞳に届いた。セツクは萌に近づくと彼女の両手を優しく握った。

「Goddess bless you。」

萌を包むセツクの手が一瞬だけ淡いきらめきを放った。

「わたしからの贈りものです。」

一こと言い残すと、セツクはそのままガラスカウンターの隙間から店の前へと出て行った。商店街の人々は、あいも変わらず富海精肉店を取り囲むように様子を伺っており、先程より少し人数が増えているようだった。店内の二人も含め、皆がセツクに注目していた。

「みなさん。」

富海が初めて見た時の、天上界の女神たちが良く知る、能天気なセツクの表情と声だった。

「長らくご心配をおかけしていましたが、富海精肉店は本日より通常の営業体制に戻ります。皆さまのご愛顧に感謝いたします、本日は今日より全品四割引！今夜はすき焼きでもビフテキでもどーんといってみよー！」

セツクも声をきっかけに、それまで様子をうかがっていた買い物客が一斉に押し寄せてきた。大挙して押し寄せる客たちは、告白直後の富海にも涙まじりの萌にも容赦なく注文を押し付けてきた。富海は暴徒と化しつつある客たちの隙間から大声を上げた。

「こら、セつちゃん。いきなり何勝手なこと言っつてやがるんだよ。」

「富海さん、萌さん。女神は嘘についてはいけないんです。だから、わたしが四割引って言っつたら四割引なんですよ。」

「セつちゃん。」

萌の呼びかけにセツクはにこやかに微笑みかけながら人々の輪から離れていった。

取り囲んでいた人々はセツクの一声につられ富海精肉店に殺到して行った。その人々の流れに逆らって離れていったセツクは、立ち止まっていた人影に行き当たった。富海萌と同じデニムの上下を身にまといキャップを目深にかぶった女性だった。しかしキャップの下から伸びる髪は美しい亜麻色でどう見ても日本人の物ではなかった。今まで周囲の人たちに気にされなかったのは、富海たちに関心を向けていたからかそれとも魔法術の効果だったのか。

「ちよつと似合っつてないかな。」

ベルダンディーは無言だった。わずかに肩が震えている。人間には聞こえずとも、女神の聴覚であればこの位置からでも店内での会話は聞こえたことだろう。

「聞いてたのね。」

セツクの問いかけにベルダンディーは無言でうなずいた。セツク

を見返す大きな瞳がキャップの下で涙に潤んでいた。

「わたし・・・今まで何も知らなくて・・・。」

「子供は知らなくていいの。」

セツクは手を伸ばし白い指先でベルダンディーの涙をぬぐった。

「何てね。一度言ってみたかったの。」

ベルダンディーはセツクの手を取り強く握り返した。この子がわたしより背が高くなったのはいつのことだったかしら、とセツクは思った。初めて会った日は自分の方がわずかに身長は高かった。仕事と平行して講習と検定を修了し、神格の最上級である限定解除までもう手が届くところに来ている。初めて女神総長に引き合わされ、指導員を任された日からベルダンディーはいつもまつすぐ前を見て力強く大地を蹴りながら背中の翼で風を切るように生きている子だった。自分が教えられることなどほんのわずかだった。

セツクは手を握られたままベルダンディーと共に商店街を歩き始めた。

「聞こえたと思うけどわたしね、仕事に就く前はずいぶん長い間入院してたの。何日も何日も眠らないで、窓の外を見ながらぬいぐるみ抱いて子守唄歌ってた。いろんな先生が診てくださったと思うんだけど、どんな方々がいらっしやったのか、そこがどの病院だったのか、全然覚えていないの。悲しくて寂しくて、ただ子守歌を歌い続けてた。実はあの頃自分が何を考えてたのかよく覚えてないんだけど。」

「こんな話をこの子にするなんて思ってもいなかった。出会った時は妹ができたようであれしかったが、気がつけば女性らしく美しく成長し、今では自分の上司にあたる地位にある。自分のわがままな仕事ぶりのため色々と後始末をさせてしまったこともあるし、ベルダンディー本人から厳しく叱責をされたこともある。今まで一緒に仕事が出来たことにとても感謝をしている。」

「一人だけ覚えてる方がいるの。背が高くて肩が広くて、おひげをたくさん生やしてらした方。その方がおっしゃったの。いつか世界ラゲナレク

乃終焉がやってきた時、娘は魔界の尖兵として剣を振るって必ずわたしのところに来るはずだって。その時まで静かに生きていればそれでいいって。そう言われてから、いつか必ずあの子に会えるんだ、名前も顔も額の紋章も覚えていないけど会えば必ずわかるはずだって思えるようになったの。」

セツクの手のぬくもりを感じながら、ベルダンディーは考えた。天上界にあって天兵や天女を除き神格を有する者は決して多くないが、セツクの言う神物じんぶつについてベルダンディーは心当たりが無かった。しかし一度もその顔を見たことのない神物であれば……。
「たぶん、あなたが想像している方だったのよ。わたしなんかをお救い下さるために来て下さったんだわ。その後は一度もお見えにならないかったから。」

「セツクがしたことが正しかったからよ、きつと。あなた自身が深く傷ついてしまったけど、ああしなければもつと悲しいことが起きてしまった。あなたが全て引き受けてくれたからこそ、みんな救われたに違いないわ。」

「そう言ってくれるのは女神としてうれしいわ。でもわたし今でも時々悲しくて一人でいられない時があるの。だから知らない男のひとに抱かれたこともあるし、自分で自分の心臓を引きずり出してしまいたくなることもある。まあ、そんなことじゃ死なないんだけどね。」

そのまましばらく、二人とも無言で歩いていた。ベルダンディー、あなたでも答えに窮することがあるのね、とセツクは心の中で思った。駅前までたどりついた所で立ち止まり、セツクはベルダンディーに向き直った。

「二級神セツク、契約者の依頼は何とか果たしました。でも二人のためにもう一つだけやっておきたいことがあります。あと少し地上界に滞在することを認めていただけますでしょうか、一級神ベルダンディー。」

ベルダンディーはセツクに笑顔を向けた。必死の笑顔だった。「

笑顔はこぼれ出るもの」と教えてくれたひとに、これ以上の涙は見せまいと思った。

「あなたの滞在はすでに規定の期間を超過しています。本当はもう連れて帰ろうと思っていました。でも、二級神セツクの申請を了承します。悔いの無いように。」

「ありがとう。」

笑顔でセツクは振り返り商店街を歩いていった。ベルダンディーは袖で涙をぬぐうと降臨したアクセスポイントを目指し歩き始めた。

駅前から路地を一つ入った所に、店構えの古い洋服店があった。

すでに老境の域に入った職人が営むオーダーメイドのスーツをしつらえる店である。隣の建物との間は人が出入りするに十分な間があり、古い姿見の鏡などが出してあった。そしてその奥で、二人の人影がしゃがみこんで話していた。

「この街だな、女神がいるのは。」

「どうもこの先の食い物を売る店にいるようだ。」

黒い服を着た二人組のうちの一人が懐から透明な容器を取り出した。中には数十匹の毒虫がうごめいていた。

「こいつをこっそりとその食い物の中に仕込む。」

「知らずに食った人間はのたうち回りもがき苦しみ、女神への信仰はガタ落ち。」

「まさに完璧な計画。」

大口を開けて笑うこの二人、幸福量の増幅をかぎつけて人間界へと現れた魔属である。そこに一陣の突風が吹きつけ、手にした容器が風に押されて地面に落ち砕け散った。中の毒虫が這い出すかと思われたが、虫は地面に落ちると同時に白い蝶に姿を換えそのまま飛び去ってしまった。風が吹いた方を二人が見るとそこには一人の女性立っていた。身につけている衣服が人間と同様の物であったため、二級の魔格すら取得していない二人組にはただの人間に見えた。

「何だ、貴様は。」

「お願いがあります。」

その静かな一言に、強い圧迫感を感じた。しだいに視覚に強い刺激を感じ始めた。自分たちとは属性のまるで異なる存在が発する波動が、異界での存在を確定する保護フィルターを突き破り徐々にそれを蝕んでいくのがわかる。このままではそばにいるだけで自分たちの存在を打ち消されてしまう。

「まさか女神……。」

「しかも一級？事前情報ではこれ程強力な女神がいるとは聞いていなかったぞ。」

二人組の呼吸が荒くなつた。この間合いで何か仕掛けられれば、自分たちの力量では対抗する術がない。命の危険を感じ、背中に冷たいものが走っていった。

「お願いがあります。」

繰り返された言葉に、魔属は卑屈な声で答えた。

「な、何でしょうか。」

「今日はこのままお引取り下さい。わたしも手荒なことはしたくありません。」

相手の言葉に逃走の余地があることを感じると更に卑屈な表情を浮かべた。

「はい、我々ちようど魔界に帰るところだったんですよ。」

「いやだな姐さん、うちらが何かすると思いませんか？」

「それじゃ、失礼します。」

二、三步後ずさると二人組は振り返り脱兎のごとく駆け去っていった。この奥は行き止まりであるが、おそらくゲートの一つも敷設してあるのだろう。魔属の気配が消え去った後、光球が後を追った。下級魔の作るゲートであればそれで簡単に相殺される。

壁に立てかけられた姿見に左掌を当てると、しなやかな指の周囲から鏡面が溶けるようにゆらぎ少しずつ左上肢を埋もれさせていく。通りを歩く人がこちらを見ていないことを確認すると、ベルダンデーィはそのまま鏡の中に姿を消した。唯一の目撃者であった三毛猫

が静かに近づき前足で鏡を撫でてみたが、そこにはやはり前足を差し出す猫の姿が映るだけだった。

セツクは駅前通りの電器店までやって来た。この店主も富海の家での宴会によく顔を出していた口である。ちょうど店主が店の前で届いた商品を段ボール箱から引き出している最中だった。

「こんにちは、何してらっしゃるんですか。」

「ああ、セツちゃん。これね、新商品なんだよ。家庭用のカラオケ。」

「カラオケって、営業の終わったお風呂屋さんで空の桶に乗って歌を歌うっていうアレですか。」

「そうじゃなくて・・・まあいいや。とにかくこの機械があれば、どこでも伴奏付で歌が楽しめるってわけなんだよ。」

自慢げに機械をポンと叩いてみせる店主にセツクがにこやかに尋ねた。

「どこでもってことはここでも歌えるんですよね。」

店主がにやりと笑い、電源とマイクを接続した。

「はい、どうぞ。試してみな。」

マイクを手渡されたセツクはうれしそうに通りの方を向き、人差し指を伸ばした左手を高々と上げて注目する人々に宣言した。

「一番、お肉屋のセツちゃん、『風のファルセット』歌いまーす！」

富海精肉店は創業以来の一大事を迎えていた。途切れる事の無い客足に富海良太も萌も、右往左往七転八倒の忙しさである。富海はこのところ接客をほとんどセツクに任せていたし、萌に至っては数ヶ月店に立っていない。それでも店頭と板場を二人で行ったり来たりしながら何とか目の前の注文をさばっていた。ガラスケースの中の肉があつと言う間に減っていき富海は冷蔵庫にも出入りしなければならなくなり、躊躇する妻を一喝して揚げ物を作らせた。「タワシでも何でもいいから揚げて食わしとけ」との暴言が客の耳に入

らなかつたのは幸いである。そんな中包丁をさばいていると、遠くから歌声が聞こえてきた。よく聞くとセツクが歌っているような気がする。

「人にこんな苦勞させといて、何呑気に歌なんか歌ってやがる。」
富海は齒がみしながら店頭で肉を運んだ。出した先から牛肉も鶏肉も豚肉も飛ぶように売れていく。萌の揚げたコロツケも次々と買われていき、無くなれば客が行列を作って待っていた。材料が無くなると思ったところには馴染みの問屋が、セツちゃんに電話をもらったと言いつつ配達してきた。顔を真っ赤にして富海は怒鳴りかけたが、横で懸命に油を使う妻の姿を見て黙って受け取った。客の行列は伸びる一方であった。

三度目の補充をした時、富海は異変に気がついた。全く顔を見たことのない客が続いているのである。よく考えれば馴染みの客は第二波でほぼ終わつたはずだ。外の話し声をよく聞けば聞き慣れない方言が入り混じっている。こいつら一体どこから・・・と考えるゆとりは無かつた。他所の方言であれ外国語であれ注文に応える義務が富海にはあるのだつた。商店街に歌声が響き続けていた。

女神の歌は祝福である。

今、この国の首都からはずいぶん離れた田舎町の、小さな商店街に女神の歌が響いていた。フォークやロック、ワルツやマーチにバラードまで立て続けに様々な楽曲が歌われた。歌を聴いた人々が自然と街へ集まってきていた。人々の心の中に反響した歌は、更にそばにいる人と共鳴を繰り返した。女神の歌はどんどん広がっていく。人々に幸福をもたらしながら。

疲れきった富海は店先のガラスカウンターに手をついて立ったまま動けずにいた。店の中は空っぽだった。全ての肉を売りつくしたのだった。追加発注の分を含めてもおそらくは三日分の売り上げがあるだろう。もっとも四割引ではおそらく利益はいつもと変わらないだろうが。

尋常な状況でないのは富海の店だけではないようだ。通りは人であふれかえっている。正面に見える店舗も先刻売切れの札を出したところだった。そして閉められたシャッターの前でどこから現れたものか屋台が立ち商売を始めている。どう考えても非合法な行為なのだが、誰も制止しないところを見ると商店会の誰もが目先の客に追われているのである。休日でも祭りでもないのにこの人出、いや休日でも連休でもこの商店街にこれほど人があふれたことはない。マンハッタンか北京かそれともカルカタかというくらいの人々の多さである。そのいずれにも富海は行ったことがないのだが。

この原因は想像がつく。今この街にいる人間の中で心当たりがあるのは富海だけのはずだ。

歌が聴こえている。先程ようやく気がついたのだが、歌は商店街の各所に設置されるスピーカーから聴こえてくるのではないのだった。そして声の主は間違いなくセックだった。セックが魔法の歌で

人々を呼び集めているのだと、富海は考えていた。

「まったく何なんだ、この騒ぎは。九品山の大祭だってこんなに人集まらねえぞ。」

裏口から和義が入ってきた。手にした缶ビールを富海に放り投げた。よこし、萌の分をカウンターのの上に置く。自分の缶を引き開けた。ゴミ箱に投げたプルトップは、狙いが外れて軽い音とともに床に落ちた。

「店いいのかよ。」

富海も缶のふたを開けながら和義に尋ねた。

「蔵の奥の古酒も、返品予定のビールも全部売っちゃった。この三本が最後だよ。」

「他の店は。」

「八百屋も薬屋もこっちの通りの店は全部閉めてたぜ。」

十分に冷えたビールが疲れた体に染みだした。富海はまだ板場から出てこない妻にも声をかけた。

「県外からも人来てるな。」

「そうそう、さっき表通り見たらよ、釧路ナンバーのすんげえカッコいいブルーバードが走っていったぜ。」

「それ多分うちの客だわ。北海道訛りの夫婦が来てたから。男の方は全然しゃべらなかつたけど。」

その時萌が奥からコロッケの乗った皿を持ってやってきた。表情がこわばっている。よほど疲れたのだろう。

「せっちゃんのせいでひでえ目にあつたな。片付けいいから二階で休んでろよ。」

「せっちゃんって?」

和義の問いにどちらとも答えなかった。ただ、萌は皿を富海に差し出したまま立っていた。

「悪いけど、今食いたくないよ。」

「お願い、食べてみて。」

萌の言葉に渋々コロッケをつまみ上げ富海は一口食べた。舌の上

で広がる味覚に表情が変わる。残りを全て口に入れ、咀嚼しゆつくりと味わう。飲み込んでから妻を見つめた。和義が勝手に皿に手を伸ばすのに全く気がつかないほど、富海は驚いていた。

「萌、いったい何で……。」

「さつき、彼女が握ってくれた手が今でもまだあったかいの。無我夢中で揚げ物作ってた時、何だか手が勝手に動いてるみたいな感じだった。」

皿をカウンターに置いて、萌は自分の手を撫でていた。長らく仕事を離れていた妻に揚げ物を作らせざるを得ぬ状況だったが、コロッケの仕上がりについてはクレームを覚悟していた。だが客が文句を言いに引き返してくることはなかった。人ごみに逆らえなかっただけかと富海は思っていたのだが。

「おお、おばちゃんの味だ。」

夫妻の驚愕をよそに、和義は極めて率直に感想を述べた。

「萌ちゃん、これいけるよ。富海の母ちゃんが作ったのくらいにうまいぜ。このところ毎日揚げ物やってた甲斐があったってもんだな。」

「……今何だった。」

富海が和義に問い質した。

「うまいって。」

「その次。」

「だから毎日揚げてたらうまくなったって。先月か先々月だけ、萌ちゃんに揚げ物やらせ始めた時は大丈夫かって心配してたんだよ。そしたら何か中学生とかにえらく評判いいみたいだし、萌ちゃん不器用乗り越えてがんばってんだなってみんな褒めてたぜ。」

和義の話を聞くや否や富海は急に店の外へと飛び出し、萌も後を追った。缶ビールとコロッケを手にした和義は突然一人取り残されてしまった。

「残り……食っていい？」

店から駆け出した富海は混雑の中、妻の手を握り駅前通りを目指した。屋台や露天がそこに出始め、飲食店に納品にやってきた卸業者の姿も見えた。灯り始めた街灯の下では、学生と思しき髪の長い若者がギターを抱え愛と平和を歌っている。商店街はまさに「お祭り」と化していた。

富海は通りで顔見知りを捕まえてはセツクの行方を尋ねた。

「魚屋のせつちゃんなら、去年大阪の大学に行ってから一度も戻って来ないって親父が嘆いてたな。」

「あれだろ、左官屋の親方のこないだ生まれた初孫がせつちゃん。」
「お好み焼き屋のせつこ婆さんならこないだ店ですつ転んで骨折って入院したらしいよ。」

あの時富海の店での連夜の宴会にセツク目当てで来ていた連中が、和義同様セツクのことを全く口にしなかった。通りを駆けていると中学生の一団が萌に向かつて「お姉さん」と手を振ってくる。

「今日もコロツケおいしかったよ。」

萌はどうしたらいいのかわからないような顔で手を振り返した。

「今日もって言うてた。」

富海の後ろについて走りながら、萌は不安気な声をあげた。

「どうゆうことなの。昨日私あの子たちに何か食べさせたわけじゃないのに。」

「今日、コロツケ買ってつたる。つまり、昨日のコロツケと一緒に、今日もおいしかったってわけだ。」

二人は駅前まで辿り着いた。人ごみをかきわけて走り、二人とも息を切らせていた。辺りは暗くなりかけていた。しゃがみこみながら、萌は疑問を口にした。

「だって、昨日お店でコロツケ売ってたのは私じゃない。」

「じゃ何であいつらは、お前に今日もって言ったんだ。それだけじゃない。せつちゃんの顔見たさにうちに集まったスケベ親父どもが何でせつちゃんのことをわからない。和義は何でお前がずっと揚げ物してたって言ったんだ。」

「みんな、セつちゃんのこと忘れちゃったっていうの？そんなことがあるの？」

「歌のせいか……。」

夫に言われて萌は、駅前景色をもう一度眺めた。しばらく離れていたとはいえ、この数年暮らしてきた街である。それが見慣れぬ多くの人間でこった返し、まるで違う街のように見える。先日まで友人を頼って東京に出ていたが、引越した友人を訪ねて初めての街の駅に降り立った時の感覚を萌は思い出した。そして、ふと気がつくときセツクの歌声が聞こえなくなっていた。

「良ちゃん、歌……。」

「くそ、どっちだ。」

富海は萌の手を引き再び走り出した。無理やり走らされる苦しさより、自分の手を引いてくれる人がいる嬉しさが勝った。セつちゃん、あなたの贈り物ってこのことなの？夫の手を少し冷たく感じるほど自分が暖かかった。このぬくもりはセツクの手から自分の手に与えられたものだ。生来の不器用さが鳴りを潜め、初めて義母が食べさせてくれた時に感動すら覚えたコロツケの味を自分で揚げたのだった。夫に言われ揚げ物にとりかかった時は無我夢中だったが、最後の客が買ったそばからコロツケをほおばっておいしそうに食べているのを見て、残りを自分でも食べてみた。不器用な自分が作れるはずのないコロツケができあがっており、自分の手にまだセツクが握った時の暖かさが残っていることに気がついたのだ。

人垣の多いところを目指して進んでいけば、駅前通りの電器店まで辿り着いた。店主が上気したような顔で、カラオケの機器を片付けようとしていた。これに違いないと富海は思った。

「おっさん、ここでうちのセつちゃんが歌ってたろ。」

「……セつちゃん？」

呆けたような顔で店主は、機器を抱え上げながら富海の問いに答えた。

「セつちゃんって、どこの？」

「今ここで歌つてた女、どこに行つた！」

富海の怒気に押され店主は戸惑っていたが、しばらくして橋に向かう路地を指差した。富海が駆け出し、萌が礼を言つてついて行く。走りながら萌は夫に尋ねた。

「電器屋さん、もうちよつとでせつちゃんのこと完全に忘れるところだつたのかな。」

「みんながせつちゃんのこと忘れて、記憶の抜けたところには萌、お前が入つていつてるんだ。」

「あの子そのために、こんなお祭り騒ぎを引き起こした・・・。」
路地を抜け土手を駆け上がると、商店街と打つて変わり人の姿は見られなかった。月光の中で河川敷や対岸を見渡すことはできたがセツクの姿などどこにも見当たらなかった。

「今日はせつちゃんのせいで死ぬほど働かされたんだぞ。文句のひとつも言わなきゃ気が済まねえ。」

腹立たしげに落ちていた石を河に向かつて放り投げた。水面から小さな音上がる。立て続けに石を拾つては投げ、拾つては投げを繰り返した。萌は土手の上でじつと空を見上げていた。やがて足元の石が無くなると、富海は座り込み力なくうなだれた。

「もう、帰つちまつたのかな。お礼まだ言つてないのによ。」
しばらくの無言だったが、萌がつぶやいた。

「良ちゃん。」

「何だよ。」

「あたし今朝宿出る時、天気予報見たのよ。今夜は大雨になるつて。」

「天気予報なんかしよつちゆう外れるだろ。」

「空見てよ。」

富海は座つたまま空を見上げた。セツクが初めて現れた夜と同様、見事な満月だった。強い月光で星が見えず、夜の空は晴れ渡つて・・・いかなかった。富海は再び立ち上がり街の上の空を見回した。満月を囲むように黒い雲は丸く穴が開いている。それはまるで、商店街

を照らすためだけに月が出ているようだった。

二人が月を見上げてみると、その光が強くなっていった。周囲が段々と明るくなる。そして二人からほんの十メートルほど離れた所に立つ人影を映し出した。

「セつちゃん。」

萌がその影に気づいた。白い月光に照らされたセツクは萌の見たことが無い美しい衣装を身にまとい、結い上げられた黒髪には白銀の髪飾りが輝いていた。富海も萌も、その姿に見とれ声も出なかった。上空を見上げたセツクが少しずつ光の中を浮かび上がっていく。セツクを中心に照らす光が少しずつ絞られていき、まるで天への道をつけているようだった。セツクが二人を見下ろす。その笑顔が少しずつ、上へ上へと遠ざかっていく。それにつれ彼女を包む光の明るさが弱まっていく。徐々に消え去ろうとする女神の姿を富海は無言で、萌は涙を流しながら見送った。二人が手を振ることもできぬまま光の道は閉じていき、もとの空へと戻っていった。そして月を囲っていた雲の門がしだいに閉じていく。

「良ちゃん、あたしほんのちょっとしか一緒にいられなかったけど、彼女のこと、絶対忘れないから。」

「ああ、彼女のこと覚えてるのは、きつと世界で俺たちだけなんだ。」

二人の影が寄り添った。雲が月を覆い川沿いに暗闇が広がり、一つに重なった二人の影を隠してしまった。

セックがお助け女神事務所に戻るとアクセスブースの並んだフロアは全て消灯されていて、起動していたのはセックの使用していた筐体だけだった。終業時刻を過ぎてしまったようだ。セックはタッチパネルを操作し、ブースのOSをシャットダウンし主電源を切った。フットライトのみ点灯された螺旋階段を静かに下りて、サービス課のオフィスに戻る。この時刻には保安関連の機器のみ電源が供給されているので自動ドアが開かない。ドアの定められた場所を法術により通り抜けて入室しなければならなかった。

勤続期間が長いとはいえ、あまり神格を取得していないことと降格処分を何度も受けていることもあってセックの課内における序列は高くなく、彼女のデスクは広大なオフィスの入り口付近にあった。サービス課の職制では課長や主任は置かれておらず、スタッフを四チームに分けそれぞれのリーダーが分担して業務を指揮している。セックの属するチームのリーダーはベルダンディーが務めていた。

書類やファイルや雑然と積まれたデスクにつき、足元の通勤用バッグからマグボトルを取り出すと誰も見ていないことを良いことに直接口をつけて中のお茶を飲んだ。若手から「セックのブラックホール」と揶揄されるほどで、どうにも片付けの苦手なセックはメモや端末用記録メディアを度々紛失する。本人曰く事務仕事が板につかないとのことなのだが、人間界での家事や掃除の手際は果たして他の女神にどう評価されていることだろう。

お茶を飲み干し一息つくくと、覚えの無い紙片がデスク上に貼り付けられているのに気づいた。他の女神からの伝言だろうと開いてみると、そこには端正な文字が手書きで記されていた。

「滞在期間の超過、規定以上の幸福量供与等について女神総長より説明を求むとの通達あり。事務次長と管理主任の連名にて、セックの手腕たるや若干迂遠なるも契約者及び関係者の幸福大なりにして

熟練の技を認めると言上せば、女神総長よりは認との回答あり。ただし、報告書は帰る前に必ず提出して下さい。」

最後は口語で記されたベルダンディーからの伝言だった。オフィスの最奥部に目を向ければ、遙か遠くのデスクが一つ照明を灯している。報告書を受け取るまで帰らないつもりだろう。どうしようかなあ、とセツクは思案した。今から報告書の作成などにかかればいつ帰れることかわかったものではない。しかし話が女神総長まで及んでいるとなれば、明朝一番で次長のところまで報告書の提出がなされなければまた問題になるだろう。セツクは座ったまま魔法術を一つ使った。幻影術イリュージョンで自分のダミーを作ってみた。顔の造りは抽象画のようで動きは操り人形みたいだが、とりあえず出入口の方にかけてみた。遙か遠くのデスクから朱ペンが音速で飛んできて、ダミーの頭を貫通し壁に突き刺さった。彼女の上司は仕事が終わるまで帰宅させない意向を明確に示していた。

絶望のため息をつきながらセツクは端末を立ち上げた。前面の空間にデスクトップが浮かび上がると、文書作成用のアプリケーションソフトを起動させた。画面の隅に電信メールの受信を知らせるアイコンが明滅しており、そちらも同時に開いてみるとベルダンディーからのメッセージだった。

「コピーは厳禁です。」

先を越されてしまった。前回提出した報告書は公開アップロードされていた似たような事例紹介記事を丸写しし固有名詞と日付等の数字を差し替えて作成したのだが、物の見事にベルダンディーに看破されひどく説教をされてしまった。「後輩」としての顔と「上司」としての顔は見事に使い分けられている。そんな話で先日ベルダンディーの姉と呑みながら盛り上がったこともある。

ペン立てに差してあった眼鏡をかけると、ゆっくりとした操作でセツクはキーボードを叩いていた。ブラインドタッチなど何をしたら身につく物か、未だに両手の神差指ひんちゆび二本しか使えない。眉間にしわを寄せ今回の仕事について記憶を振り絞り文章を連ねていく。一

ページ書き上げたところで共有フォルダから管理課の記録簿を開き、支援記録の数値やグラフを確認する。すると数字と整合性の無い文言があるのに気がつき、五十行近く削除して書き直す。引き出しの奥から小瓶を取り出し、キャップを外してセツクは中の液体を一気にあおった。苦味に顔をしかめながら再度文章を打ち始めた。そうして二、三本のドリンク瓶をデスク上に転がして、時計が日付を更新したところにセツクの報告書はようやく完成した。

書き上げた報告書を手におフィスを歩いていったセツクだったが、途中で立ち止まり大きくあくびをした。今夜は宿直室に泊まっちゃおうか、と考えながらベルダンディーのデスクに辿り着いた。

「ベルダンディー・・・報告書できたよ。」

自分のと違いきれいに整頓されたデスクに向かう上司に声をかけた。並べ立てられたファイルの影から覗き込むと、ベルダンディーはデスクに伏せて眠ってしまった。手元には機関経営学概論の参考書が広げられている。勉強しながら待つていてくれたのだ。

「まだ試験いっぱい受けなきゃいけないのに、何でわたしのことなんかかまうかな。」

報告書を置きながら寝顔を眺めた。通常業務から事務処理、自主研修会の主催とリーダーとして他の女神の模範になり、尚且つ常に表情に笑顔を絶やすことなく働いている。そして専科学校の公開講座やゼミにも顔を出し、限定解除を目指し神格取得のため専科卒業後も日々勉強を続けている。それだけ多忙であるにも関わらず、何かとトラブルを起こすセツクにいつもつきあって残業するはめになるのだ。いつ愛想尽かされても仕方ないとセツクは思っていた。だが自分の過去についてこの子にだけは知られまいと思っていたことを、ついに知られてしまった。自分はこれ以上どうすることもできない、ただ自分にできることをやりながら世界乃終焉ラグナレクを待つのだとずっと考えていた。永遠に生きることを義務付けられた身であればそれしかなかった。

後輩の柔らかな頬を指先で二、三度つついてみた。ん・・・、と

声を上げるが起きそうにない。面白いのもう一度つついてみたが結果は同じである。寝顔を見てみると、初めて出会ったころのまだ幼さの残る表情が思い出される。セックは法術を唱えベルダンディを宿直室のベッドへと転送した。デスクに残された物を適当に積んでおき照明を消した。自分のデスクは面倒なので端末をシャツトダウンして照明を消すだけで済ませ、バッグを肩にかけオフィスを後にした。

宿直用のベッドはもう空きがないのでセックは自宅に帰るしかない。人間界であれば少々の距離は瞬時に移動できるが、アスガルドでは空間構造が複雑な上に深夜は防犯上の理由から安易な転移術の使用は許可されていない。お助け女神事務所の通用門から外に出てIDを入力してロックをかけた。

「タクシー拾って帰るかな。」

セックは駅方面へ向かって歩き始めた。

ベルダンディは、自分が木造の建物内の廊下に立っていることにいきなり気がついた。夜半を過ぎているようで、窓から見える景色は灯りがわずかしか見受けられない。しかし完全な静寂につつまれてはおらず、乳児の泣き声や足音を立てないように気を遣いながら急ぐサンダルの音が耳に入ってくる。そして鼻腔をくすぐる薬品と少しの血の臭い。改めて窓の外の景色を見て、自分の知らない所ではないことに気づく。非公式ながら降臨した人間界のとある街だ。そしてここはその街外れにある産院であろうと予想を立てた。窓ガラスに映る自分の姿を注意深く観察すると、わずかな光量の中で白いワンピースをまとった肢体が透けて見えている。

ああ、今わたし夢を見てるんだ。

女神の夢が肉体を離れ遠い異世界にやって来てしまうことはよくあると言えはよくあることだ。ベルダンディは裸足で院内を歩いてみた。夢で人間界にやって来たからには、多少自由に過ごすことができる。不思議な開放感に駆られて、病室の入り口に書かれた入

院患者の名札を見て回った。この場所に自分が来たと言うことは、あの人が入院しているはずなのだ。

富海萌と書かれた札を見つけたドアをノックしかけたが、時間を考え黙ってドアを開けることにした。造り付けの寝台には、降臨した際遠めに見かけその衣装を模倣させてもらった人間の女性が眠っていた。その横に生まれたばかりの赤ん坊がいる。指をしゃぶった赤ちゃんがふいに目を開きベルダンディーを見つめた。しばらく見つめ合っていると、赤ちゃんが満面の笑顔を浮かべた。

セツク、あなたの仕事はちゃんと実を結びましたよ。

ベルダンディーは赤ん坊の頭を優しく撫で眠りにつかせた。病室に朝陽が差し込むまでの間、安らぎの表情で眠る母と子を静かに見守り続けたのだった。

chapter・12(後書き)

私の記憶が正しければ、「夢の降る街」(・91)という映画の吹替版ビデオでデミ・ムーアの声を井上喜久子が演じたはずである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1787i/>

北天女神譚異聞 ~ Butcher's Wife ~

2010年10月8日12時01分発行